

An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji*, 7

Yosuke KAWAKAMI

Center of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

らず捨ててしまえ。一人残らず客が眉を顰めていようなまずい酒を、客に飲ませるということ自体が、そもそも間違っているということじゃ。」

極めて野暮なことながら、この話の「笑い」の構造を丁寧に解説すれば、以上のようになるであろう。舞台でお笑い芸を味わっているような感覚で、笑話を味わい尽くして頂きたいものである。

(附記)

本稿は、令和二年度科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号一七K〇二四五六一)「東アジアの笑話と日本語・日本文学に関する複合的研究」による研究成果の一部である。

どないするつもりやねん。(まさか客に飲ますつもりやないやろな。いや、飲ましてるやんけ。この野郎。)

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部(二九丁裏)三〇丁表。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部(第二一四話、一六丁表)裏。○灸罈 [zhī tǎn] ≡ 酒甕を炙る。○個々 [gè gè] ≡ おのおの。一人一人。「各各 [gè gè]」と同じ。左訓「ミナミナ」(皆々)。○委吞 不下 [wēi tūn bù xià] ≡ 呑み込むことができない。ただし、中国資料における「委吞」の用例未詳。「不下」は、動詞の後に置かれ、その動作を下方向に動かすことができないうことを表す、方向補語の不可能形。可能形は「動詞+得下」。左訓「ノミコマレヌ」(呑み込まれぬ)。○我有易他良法。使他不酸。≡ 私には、酒を酸っぱくしないようにする、良い方法がある。「有」+名詞+動詞句(…する)がある)という言い回しは、現代中国語でもしばしば用いられる、中国語らしい表現である。和刻本は、「易」字を「易」に見紛うような書体で刻しているが、「易 [yì]」(「変える」意)と「易 [yáng]」(「陽」の古字)は別字であり、発音も意味も異なる。また、和刻本は「有易他良法」に、左訓「ナラスシカタガアル」(直す仕方がある)を附す。○將酒罈覆轉向天 ≡ 酒甕を、真つ逆さまに、ひっくり返す。「將 [jiāng]」は、目的語を動詞の前に出す前置詞(介詞)。日本語の「を」に当たる。「轉」は「転」の本字。和刻本は、「酒罈」に左訓「サケツボ」(酒壺)、「向天」に左訓「ウツムケ」(俯け)を附す。○底上用艾火連灸七次 ≡ (ひっくり返した酒甕の)底に艾を載せ、続けて七回、お灸を据える。和刻本は、「用」字に送り仮名「エ」を附し、「(お灸を)すえ」と読ませたものと思われるが、極めて珍しい訓である。また、和刻本は「底上」に左訓「ソコニ」(底に)、「艾火」に左訓「モクサ」(もぐさ)、「連灸七次」に左訓「ツ、ケテナ、ヒスエル」(続けて七度 据ゑる)を附す。「ナナタビ」とあるべきところが「ナ、ヒ」となっているのは、原文のまま。○拿起 [ná qǐ] ≡ (ひっくり返った酒甕を)手で持って、(元通りの向きに)起き上がらせる。「拿 [ná]」は「手で持つ」意を表す動詞。「起 [qǐ]」は、動詞の後に置かれ、その動作によって物が上方向に移動することを表す方向補語。いずれも現代中国語と同じ。和刻本は「拿」字に右傍訓「トリ」(取り)を附す。○自然不酸 ≡ 自然に酸っぱくなくなる。自ずから酸味が抜ける。和刻本の訓点に従えば、「自

然に酸からず」と書き下すべきところだが、直前に「使他不酸」(他を酸ならざらしむ)とあるのに倣い、「自然に酸ならず」と訓んでおく。○豈不傾呑漏乾了 ≡ (酒甕を)傾けたら、(中に入っている酒がすっかり外に)漏れ出して、空っぽになつてしまふのではないか。「豈不 [qǐ bù]」は「くではないか」という意を表す反語表現。「呑」は「去」の本字。「漏乾」は、「漏れ出す」意の動詞「漏 [lòu]」に、その動作の結果、「中身が空っぽになつてしまふ」意の形容詞「乾 [gān]」を附した結果補語の表現。「乾」という中国語は、「乾いている」意の形容詞の場合は第一声(平声)「gān」と発音され、動詞「やる」または名詞「木の幹」という意味の場合は第四声(去声)「gàn」と発音されるため、和刻本は「乾」字の左下に声点符号「〇」を附し、この語が第一声(平声)の文字であることを明示している。○不傾去、要他做甚 ≡ (酒甕を)傾け、(中身の酒を外に)出してしまわないで、それをどうしようと言うのか。その酸っぱい酒を、何にしようと言うのか(まさか客に売ろうというわけではあるまい)。「甚 [shèn]」は、「何」という意の疑問詞。現代中国語「什么 [shénme]」と同じ。和刻本は、「甚」字に右傍訓「ナニヲカ」(何をか)を附す。

## 補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

## 余説

本話は、(和刻本でも中国原本でも)「術業部」最後の話だが、やはり「酒屋」をからかっている。この店の酒は、あまりにも酸っぱいので、お客さんは、一人残らず擧めつ面をしてる。そこで、客の一人が店主をからかかって、「酒甕にお灸を据えろと、酒は酸っぱくなくなるよ。」と言った。この発言自体が、「お笑い芸」で言うところの「ボケ」であり、「そんな馬鹿な話があつたまるか。」という「ツッコミ」を必要とするものである。しかし、もちろん酒屋の店主は、それが「ボケ」だとは思わずに、「え。酒甕をひっくり返して、甕の底にお灸を据えたら、中身が漏れ出してしまふんじゃないですか。」と、真面目に質問するので、店主をからかっていた客も真顔になり、最後は本気で店主に怒りをぶつけてしまふ。

「こら店主、酒が漏れ出して当たり前なんじゃ。そもそもこんなまずい酒、一滴残

和刻本『即当笑合』第七二話「酸酒」(寛政八年(一七九六)序、京都大学附属  
図書館蔵本、巻四、一丁裏)

酸酒

一酒家招牌に写て酒毎斤八厘醋毎斤一分と兩人  
づれて店へ入て酒を沽ふところが甚だ醋し一人が  
咄して眉を擡め如何こんな酸い酒があるものか醋と  
錯て来て来であらふ友人忙て腿を捏て黙子め  
だまつている招牌の写着が看へぬか醋の方が酒に  
比べては更て貴い

なお、詳細は、拙稿『「解顔新話」全注釈』(平成二二年度〜平成二三年度 科学研  
究費補助金 研究成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」  
課題番号二二五二〇二二五、一〇四〜一〇六頁)を参照。

余説

これも酒に関する話だが、今度は酸っぱい酒を飲みながら、その店の酢は酒より値  
段が高いというだけの理由で、なんとありがたく酢を戴こうとする、セコい客をか  
らかっている。

『絶纓三笑』所収の類話に附された編者のコメントが、ここでもやはり気が利いて  
いる。

如此要小便宜。只應罰他酸酒。

こんなちっぽけな利益に目がくらむような奴には、罰として、酸っぱい酒でも食  
らせておけ。

現代中国でも、酒宴では客にやたらと「罰酒」を飲ませようとするものだが、その  
酒が「酸っぱい酒」であったら、本当の「罰ゲーム」になってしまう。『絶纓三笑』  
の「評語」は、そのことを指摘したものである。しかも、六言二句のリズミカルな表  
現を用い、格調高い箴言風の仮面を被っているところが、また憎い。

⑨5 炙罈 (酒甕を炙る)

原文

炙罈

有以<sub>レ</sub>酸酒<sub>ヲ</sub>飲<sub>ス</sub>客<sub>者</sub>。個々<sub>々</sub>擡<sub>レ</sub>眉。委<sub>レ</sub>吞<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>下。一人嘲<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>曰<sub>ク</sub>。此<sub>ノ</sub>酒  
我<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>易<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>法<sub>一</sub>。使<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>酸<sub>ナ</sub>。主人曰<sub>ク</sub>。請<sub>レ</sub>教<sub>フ</sub>。客曰<sub>ク</sub>。只<sub>レ</sub>將<sub>レ</sub>酒罈<sub>ヲ</sub>覆  
轉<sub>シ</sub>向<sub>レ</sub>天<sub>ニ</sub>。底<sub>上</sub>用<sub>二</sub>艾<sub>火</sub>連<sub>レ</sub>炙<sub>七</sub>次<sub>一</sub>。明日<sub>日</sub>拿<sub>レ</sub>起<sub>セ</sub>。自然<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>酸<sub>カ</sub>。主<sub>曰</sub>ク。  
豈<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>傾<sub>ケ</sub>罈<sub>去</sub>。客曰<sub>ク</sub>。這<sub>等</sub>酸<sub>酒</sub>。不<sub>レ</sub>傾<sub>ケ</sub>去<sub>テ</sub>。要<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>做<sub>レ</sub>甚<sub>一</sub>。

書き下し文

炙罈

酸酒を以て客に飲する者有り。個々眉を擡め。委吞し下さず。一人之を嘲して曰  
く。此の酒我に他を易るの良法有り。他を酸ならざらしむ。主人曰く。教を請  
ふ。客曰く。只酒罈を將て覆転して天に向け。底上に艾火を用ゑ。連炙すること  
七次。明日拿起せば。自然に酸ならず。主曰く。豈傾け去て漏り乾き了らざ  
らんや。客曰く。這等の酸酒。傾け去らずして、他を要して甚をか做ん。

現代語訳

酸っぱい酒を客に飲ませる店があり、(お客さんたちは)一人残らず眉を擡め、(酒  
を)呑み込むことができなかった。一人の客が、ふざけて言った。

「この酒を、酸っぱくならないようにするための、良い方法がありますよ。」

店の主人が「その方法を教えてください。」と訊ねたところ、お客さんは言った。

「酒甕を逆さまにひっくり返して、甕の底にお灸を据え、続けて七回ほど火を焚き  
付けるだけでよいでしょう。そうして次の日、酒甕を元の通りにひっくり返すと、自  
然に酸味は抜けています。」

主人は言った。

「甕をひっくり返したら、酒が(甕の口から)漏れ出して、中身が空っぽになって  
しまうのではありませんか。」

客は言った。

「こんな酸っぱい酒、漏らしてもたらええやないか。こんなもん残して、あんだ、

「Die」(くするな)の文語表現。現在でも、方言では「莫[mo]」を使用する地域がある。「聲」は「声」の本字。左訓「ダメレ」(黙れ)。○你看[ny kan]＝ほら、見てみる。さあ、見て御覧なさい。現代中国語と同じ。○牌面上[pai mian shang]＝看板(の表面上)に。「招牌的面上」という意味。和刻本は、「牌面」に左訓「カンバン」(看板)を附す。○寫着[xie zhe]＝(く)書いてある。「寫」は「写」の本字。「着」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果が定着している(く)してある、くしている)意を表すアスペクト助詞。現代中国語と同じ。○貴着哩[gui zhe li]＝(酢の方が酒よりも値段が)高いやんけ。高いっちゅうねん。高いっちゃ。「着哩[zhe li]」は、形容詞の後に置かれ、話し手の気持ちをやや強める語気助詞(方言)。現代中国語(普通話)の「着呢[zhe ne]」に近い。左訓「タカイゾヨ」(高いぞよ)。

補注

この話は、『絶纒三笑』巻二時笑・舛語六五(第一五五話「酸酒」)に類話がある。『絶纒三笑』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同があるが、文意はほぼ同じである。拙訳を添える。なお、「」内の文字は、原本に施された割注(二行)であることを示す。

唐本『絶纒三笑』第二五五話(明・万曆四四年(一六一六)序、卷二、時笑・舛語六五、東京大学文学部蔵本、三七丁裏)

酸酒

酒家牌寫酒八釐一斤。醋一分一斤。兩人入店  
 沽飲而酒甚酸。一人啞舌曰。酸酸。莫不錯拿了  
 醋來。其一人捏其腿。急曰。呆人。不要則聲。「以爲醋貴  
 而有便宜也」  
 如此要小便宜。只應罰他酸酒

酸っぱい酒

居酒屋の看板に、「酒六〇〇グラム＝〇・八錢」「酢六〇〇グラム＝一錢」と書かれていた。二人の客が店に入り、酒を買って飲んでみると、酒は減茶苦茶

酸っぱかった。客の一人は、「チェツ」と舌打ちして、言った。「おお。酸っぱい、酸っぱい。間違つて酢を持ってきたんとちゃうか。」もう一人の客は、そいつの太腿を振り、慌てて言った。「阿呆かお前。声を出すなっちゅうねん。」

【割注】酢の方が(酒よりも)値段が高いので、(黙っていた方が)旨い汁を吸える、と思つたのである。

(編者のコメント)こんなちっぽけな利益に目がくらむような奴には、罰として、酸っぱい酒でも食らわせておけ。

また、この話は、和刻本『解顔新話』(寛政六年(一七九四)序)にも収録され、小咄本『即当笑合』(寛政八年(一七九六)序)には、その日本語訳が「江戸小咄」として、そのまま掲載されている。和刻本『解顔新話』『即当笑合』の原文は、以下の通りである。なお、本文の引用は、京都大学附属図書館蔵本に拠る。

和刻本『解顔新話』第三七話「酸酒」(寛政六年(一七九四)序、京都大学附属図書館蔵本、下巻、一一丁表裏)

酸酒

一酒家招牌上寫酒每斤八厘醋每斤一分  
 分兩人入店沽酒而酒甚酸一人啞舌攢  
 眉曰如何有此酸酒莫不把醋錯拿了來  
 友人忙捏其腿曰獸子快莫做聲你看牌  
 面上寫着醋比酒更貴着哩  
 一酒家招牌に写て酒每斤八厘醋每斤一分と兩人  
 づれて店へ入て酒を沽ふところが甚だ酸し一人が  
 啞して眉を攢め如何こんな酸い酒があるものか醋と  
 錯て来てであらふ友人忙て腿を捏て獸子め  
 だまつている招牌の写着が看へぬか醋の方が酒に  
 比べては更て貴い

めたり(第九〇話「売淡酒」、第九二話「酒娘」、水を酒という名前で売ったりする話、第九一話「三名斬」)が続いていたが、今回は、「酒に酢を混ぜて売る」酒屋の不正を暴いている。

『絶櫻三笑』に附された編者のコメントが、何よりも雄弁に、この話の「笑いのツボ」を言い当てている。  
還是酒着在醋内。非醋着在酒内。

これはやはり、「酢の中に酒を入れたもの」であって、「酒の中に酢を入れたもの」ではない。

明清時代の酒屋たちは、水の中に酒を入れたり、水を酒という名前で売ったり、酒に酢を入れて売ったり、ついには、酢に酒を入れて売ったりと、あの手この手の詐欺的商法を用いて小銭を稼いでいたということであろう。

⑨4 酸酒 (酸っぱい酒)

原文

酸酒

一 酒家招牌上ニ寫ス酒ハ毎一斤八厘。醋ハ毎一分。而一人入店ニ沽酒ヲ。而酒甚酸シ。  
一人唾舌攢眉曰ク。如何有此酸酒。莫不把醋錯り取り来。友人忙ニ捏テ其ノ腿曰ク。黙子快莫做聲、你看牌面上ニ寫ス醋ハ比酒更貴着哩。

書き下し文

酸酒

一 酒家 招牌上に 酒は 毎斤八厘。 酢は 毎斤一分 と 写す。 一人 店に入り 酒を 沽ふ。 而して 酒は 甚だ 酸し。 一人 舌を 唾し 眉を 攢め 曰く。 如何ぞ 此の 酸酒 有ん。 酢を 錯り 取り 来り 来らざる 莫んや。 友人 忙に 其の 腿を 捏て 曰く。 黙子 快く 声を 做す 莫れ、 你看 牌面上に 写着 するを、 酢は 酒に 比せば 更に 貴着 哩。

現代語訳

ある居酒屋の看板に、「酒六〇〇グラム〇・八錢」「酢六〇〇グラム〇一錢」と書

かれていた。二人の客が店に入り、酒を注文したところ、その酒は滅茶苦茶酸っぱかった。客の一人が「チエツ」と舌打ちし、眉間に皺を寄せて言った。

「この酒は、なんでこんなに酸っぱいねん。間違つて酢を持ってきたんちやうか。」その友人は、慌ててそいつの太腿を掴つて言った。

「この阿呆だらあ。早黙らんかい。ほれ見てみ。メニューに書いてあるやろが。酢の方が、酒より高いっちゅうねん。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二九丁裏)。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部(第二二三話、一六丁表)。○酒家 [tɕi:ɕi] 〓 居酒屋。酒を飲みながら食事をする店。「酒屋」とは異なる。現代中国語では、レストラン(料理屋)の名前によく使用される。○招牌 [zhaopai] 〓 看板。左訓「カンバン」(看板)。○酒每斤八厘。醋每斤一分。〓 (居酒屋の看板に書かれたメニュー表の文字)「酒(の値段)は一斤(約六〇〇グラム)あたり八厘(〇・八錢)、酢(の値段)は一斤(約六〇〇グラム)あたり一分(一錢)」。このメニュー表によれば、一斤(約六〇〇グラム)あたり、酒の方が酢よりも〇・二錢安い計算になる。○沽酒 [guju] 〓 酒を買う。○唾舌 [tuo she] 〓 舌打ちする。舌を鳴らす。左訓「クチナメズリシテ」(口なめずりして)。○攢眉 [cuān méi] 〓 眉を擡める。(第九三話「着酢」に前出) ○如何有此酸酒。〓 どうしてこんなに酸っぱい酒があるのだろうか、あるはずがない(この酒はおかしい、酢でも入っているのではないか)。左訓「ドウシテコノヤウニスイサケガアルモノカ」(どうしてこのやうに酸い酒があるものか)。○莫不 [mò bù] 〓 (反語的に) 〓 したのではないだろうか。直訳は「くでないはずがない」「くでないわけがない」。○把醋錯拿了来 〓 酢を間違つて持ってきた。「把 [ba]」は、「く」という意の前置詞(介詞)。和刻本「訳解笑林広記」第九一話「三名斬」に「把我来當酒賣」という用例があり、ここでは「把」字に右傍訓「ヲ」を附している(上巻・二八丁裏九行目)。○捏 [niē] 〓 つねる。ひねる。左訓「ヒネル」。○黙子 [mò zǐ] 〓 間抜け。のろま。阿呆。「黙」は「呆」の本字。左訓「アホウ」(阿呆)。○快 [kuài] 〓 (スピードが) 速い。現代中国語と同じ。和刻本は、右傍訓「ハヤク」(速く)を附す。○莫做聲 [mò zuò shēng] 〓 声を上げるな。声を出すな。「莫」は、「くするな」「くすることなかれ」という意味の副詞。現代中国語「別

度の強調表現。和刻本は、「可」字に右傍訓「マサニ」を附す。○菜心 [cài xīn] ≡ (白菜などの) 野菜の芯。「菜心(サイシン)」という名の中国野菜(江南・広東地方の原産)もあるが、ここではより一般的な「野菜の芯」と解しておく。○腐内可要放些醋 ≡ 豆腐に、ちよつと酢を入れましょうか。「放 [fàng]」は、「(料理に調味料などを) 入れる」意の動詞。第九二話「酒娘」に前出。「放」を「イレル」と訓読するのは珍しいが、(こは直前の第九一話「三名斬」(「放了幾粒米」)、第九二話「酒娘」(「放水下去」)に附された左訓「イレテ」「イレ」に従い、「些」の醋を放んを要するや」と訓んでおく。○醋烹豆腐 [cù pēng dòufu] ≡ 豆腐に酢をかけて炒めた料理(の名前)。「醋烹 [cù pēng]」とは、料理法の一つで、中華鍋に油を敷き、酢や塩を入れて手早く炒めること。今でも中華料理の店には、「醋烹緑豆芽」(緑豆モヤシを酢と塩で炒めたもの)「醋烹大蝦」(エビの甘酢炒め)などのメニューがある。「豈」は「豆」と同義。○酒中如何着得醋 ≡ 酒に酢などを入れる奴があるか。直訳すれば、「酒の中に、どうして酢を入れることができますか。」となる。○攢眉 [cuān méi] ≡ 眉を擡める。和刻本『解顔新話』第三七話「酸酒」(第九四話「酸酒」の補注参照)は、「眉を擡め」と和訳している。「攢 [cuān]」の原義は「あつめる」。「攢眉」は、「眉間に皺を寄せ集める」意。「書き下し文」は、和刻本に「メ」という送り仮名があることから、「攢」の原義に従い、「あつめる」と訓んでおいた。○怎麼處 [zěnmě chù] ≡ あらま、どうしたものでしょう。直訳すれば、「どのように処置しましょうか。」となる。「處」は「処」の本字。和刻本は、左訓「ドウシヤウゾ」を附す。○已着下去了 ≡ (酒の中に酢を) もう入れてしまいました。「着下去」は、「入れる」意の動詞「着」に、「下に向かって離れていく」方向性を添える複合方向補語「下去」が付いた形。和刻本は、この一文すべてに左訓「モハヤスライレテシマツタ」(もはや酢を入れてしまった)を附す。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻一時笑・澹語八六(第八六話「酸酒」)、『笑府』巻十二(第五五話又「酸酒」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、二〇二〜二〇三頁)を参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。

『絶纓三笑』『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校

すれば、僅かに文字の異同があるが、文意はほとんど同じである。ただし、『絶纓三笑』には、『笑府』には収録されていない「評語」(編者のコメント)が附加されている。この部分にのみ、拙訳を添える。

唐本『絶纓三笑』第八六話(明・万曆四四年(一六一六)序、卷一、時笑・澹語

八六、東京大学文学部蔵本、四三丁裏〜四四丁表)

酸酒

有賣酸酒者。客上店。謂店主曰。腐菜足矣。但須

美酒。店主應去。少間。來問曰。菜内可着醋。客曰。

着些亦好。取菜置訖。又問豈腐可着醋。客曰。着

些亦好。取腐置訖。又問酒中可着醋。客訝曰。酒

中如何着得醋。店主攢眉曰。怎麼處。已着在內

了。

還是酒着在醋内。非醋着在酒内。

(編者のコメント)これはやはり、「酢の中に酒を入れたもの」であって、「酒の中に酢を入れたもの」ではない。

唐本『笑府』第五五話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、卷十二・日用部、

筑波大学中央図書館蔵本、一六丁裏〜一七丁表)

又(酸酒)

有賣酸酒者。客上店。謂店主曰。腐菜足矣。但須美酒。

店主應去。少間。來問曰。菜内可着醋。客曰。醋滴菜心

甚好。取菜置訖。又問曰。豈腐中可着醋。客曰。醋烹豈

腐也好。取腐置訖。又問曰。酒中可着醋。客訝曰。酒中

如何着得醋。店主攢眉曰。怎麼處。已着在酒内了。

余説

またしても、阿漕な商売をするインチキな酒屋をからかった話である。酒を水で薄

㊸ 着酢 (酢を入れる)

原文

着醋

有<sub>レ</sub>賣<sub>二</sub>酸酒<sub>一</sub>者<sub>レ</sub>。客上<sub>レ</sub>店<sub>二</sub>謂<sub>テ</sub>主人<sub>一</sub>曰<sub>ク</sub>。殺<sub>ハ</sub>只<sub>、</sub>腐菜<sub>ニ</sub>足<sub>レ</sub>リ矣<sub>。</sub>酒<sub>ハ</sub>湏<sub>要</sub>二<sub>レ</sub>好的<sub>一</sub>。少<sub>一</sub>頃<sub>、</sub>店主<sub>二</sub>問<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。菜<sub>一</sub>中<sub>ニ</sub>可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>着<sub>テ</sub>。客<sub>二</sub>曰<sub>ク</sub>。醋<sub>滴</sub>二<sub>レ</sub>菜<sub>一</sub>心<sub>ニ</sub>甚<sub>好</sub>シ。又<sub>問</sub>テ曰<sub>ク</sub>。腐内<sub>ニ</sub>可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>放<sub>テ</sub>些<sub>ノ</sub>醋<sub>一</sub>。客<sub>二</sub>曰<sub>ク</sub>。醋<sub>烹</sub>レ<sub>ル</sub>豆腐<sub>一</sub>也<sub>好</sub>シ。再<sub>問</sub>テ曰<sub>ク</sub>。酒内<sub>ニ</sub>可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>否<sub>ヤ</sub>。客<sub>二</sub>訝<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。酒中<sub>如何</sub>着<sub>テ</sub>得<sub>醋</sub>一<sub>。</sub>店主<sub>攢</sub>レ<sub>ル</sub>眉<sub>ヲ</sub>曰<sub>ク</sub>。怎麼<sub>ン</sub>カ處<sub>セン</sub>。已<sub>ニ</sub>着<sub>テ</sub>下<sub>シ</sub>去<sub>リ</sub>了<sub>ル</sub>。

書き下し文

酢<sub>ヲ</sub>着<sub>テ</sub>。酸酒<sub>ヲ</sub>売<sub>ル</sub>者<sub>有</sub>リ。客<sub>店</sub>に上<sub>テ</sub>主人<sub>に</sub>謂<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。殺<sub>ハ</sub>只<sub>腐菜</sub>にて足<sub>レ</sub>リ。酒<sub>ハ</sub>湏<sub>要</sub>二<sub>レ</sub>好的<sub>一</sub>。少<sub>頃</sub>店主<sub>に</sub>問<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。菜<sub>中</sub>に可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>着<sub>テ</sub>。客<sub>二</sub>曰<sub>ク</sub>。醋<sub>滴</sub>二<sub>レ</sub>菜<sub>一</sub>心<sub>ニ</sub>甚<sub>好</sub>シ。又<sub>問</sub>テ曰<sub>ク</sub>。腐内<sub>ニ</sub>可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>放<sub>テ</sub>些<sub>ノ</sub>醋<sub>一</sub>。客<sub>二</sub>曰<sub>ク</sub>。醋<sub>烹</sub>レ<sub>ル</sub>豆腐<sub>一</sub>也<sub>好</sub>シ。再<sub>問</sub>テ曰<sub>ク</sub>。酒内<sub>ニ</sub>可<sub>要</sub>レ<sub>ル</sub>醋<sub>ヲ</sub>否<sub>ヤ</sub>。客<sub>二</sub>訝<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。酒中<sub>如何</sub>着<sub>テ</sub>得<sub>醋</sub>一<sub>。</sub>店主<sub>攢</sub>レ<sub>ル</sub>眉<sub>ヲ</sub>曰<sub>ク</sub>。怎麼<sub>ン</sub>カ處<sub>セン</sub>。已<sub>ニ</sub>着<sub>テ</sub>下<sub>シ</sub>去<sub>リ</sub>了<sub>ル</sub>。

現代語訳

酸<sub>つ</sub>ぱい酒<sub>を</sub>売<sub>る</sub>店<sub>に</sub>、お客<sub>さん</sub>が入<sub>っ</sub>て来<sub>て</sub>、主人<sub>に</sub>言<sub>っ</sub>た。  
「酒<sub>の</sub>肴<sub>は</sub>豆腐<sub>と</sub>か菜<sub>っ</sub>葉<sub>（</sub>み<sub>た</sub>いな簡<sub>単</sub>な<sub>もの</sub>）<sub>で</sub>構<sub>わ</sub>ない<sub>から</sub>、酒<sub>だけ</sub>は、上<sub>等</sub>の<sub>もの</sub>を頼<sub>む</sub>よ。」

しばらくして、店の主人<sub>は</sub>訊<sub>ね</sub>た。

「野菜<sub>料</sub>理<sub>に</sub>お酢<sub>を</sub>か<sub>け</sub>ま<sub>し</sub>よう<sub>か</sub>。」

客<sub>は</sub>言<sub>っ</sub>た。

「お<sub>。</sub>お酢<sub>を</sub>野菜<sub>の</sub>芯<sub>に</sub>チヨロツ<sub>と</sub>垂<sub>ら</sub>す<sub>のは</sub>、と<sub>つ</sub>てもい<sub>い</sub>ね。」

(店の主人<sub>は</sub>) 又<sub>た</sub>訊<sub>ね</sub>た。

「豆腐<sub>にも</sub>、チヨロツ<sub>と</sub>お酢<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>ま<sub>し</sub>よう<sub>か</sub>。」

客<sub>は</sub>言<sub>っ</sub>た。

「お。豆腐<sub>を</sub>お酢<sub>で</sub>炒<sub>め</sub>た『酢<sub>烹</sub>豆腐 [cù pēng dòufǔ]』、それ<sub>も</sub>い<sub>い</sub>ね。」

(店の主人<sub>は</sub>) 又<sub>た</sub>訊<sub>ね</sub>た。

「それ<sub>じ</sub>ゃ、お酒<sub>にも</sub>、お酢<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>て<sub>み</sub>ま<sub>し</sub>よう<sub>か</sub>。」

すると、客<sub>は</sub>怪<sub>訝</sub>そう<sub>に</sub>言<sub>っ</sub>た。

「はあ。酒<sub>の中</sub>に、なん<sub>で</sub>酢<sub>なん</sub>か入<sub>れ</sub>ん<sub>ねん</sub>。」

店の主人<sub>は</sub>、眉<sub>間</sub>に皺<sub>を</sub>寄<sub>せ</sub>て言<sub>っ</sub>た。

「あらま、どう<sub>し</sub>ま<sub>し</sub>よう。もう入<sub>れ</sub>て<sub>ま</sub>い<sub>ま</sub>した<sub>が</sub>な。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二九丁表裏)。「新鐫笑林広記」卷之三・術業部(第二二二話、一五丁裏一六丁表)。○着醋 [zhāo cù] = 酢<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>る。「着 [zhāo]」は、「塩<sub>や</sub>醬<sub>油</sub>などを」入<sub>れ</sub>る」意<sub>の</sub>動<sub>詞</sub>(吳<sub>方</sub>言語<sub>彙</sub>)。「醋 [cù]」は、調味<sub>料</sub>の酢<sub>の</sub>こと。常用<sub>漢</sub>字<sub>では</sub>「酢」と表<sub>記</sub>さ<sub>れ</sub>る。○酸酒 [suān jiǔ] = 酸<sub>つ</sub>ぱい酒。こ<sub>こ</sub>は、酒<sub>に</sub>酢<sub>を</sub>混<sub>ぜ</sub>て売<sub>ろ</sub>う<sub>と</sub>する、阿<sub>漕</sub>な商<sub>売</sub>を営<sub>む</sub>酒<sub>屋</sub>の欠<sub>陥</sub>商品<sub>として</sub>の酒<sub>である</sub>。○「絶<sub>纓</sub>三<sub>笑</sub>」所<sub>収</sub>の類<sub>話</sub>には、「還是<sub>酒</sub>着<sub>在</sub>醋<sub>内</sub>。非<sub>醋</sub>着<sub>在</sub>酒<sub>内</sub>。」(こ<sub>れ</sub>は<sub>や</sub>はり、「酢<sub>の中</sub>に酒<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>た<sub>もの</sub>」であ<sub>つ</sub>て、「酒<sub>の中</sub>に酢<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>た<sub>もの</sub>」ではない。(拙<sub>訳</sub>)<sub>という</sub>コ<sub>メ</sub>ント<sub>が</sub>附<sub>さ</sub>れ<sub>て</sub>い<sub>る</sub>。た<sub>だ</sub>し、中国<sub>語</sub>「酸<sub>酒</sub>」には「古<sub>くて</sub>」酸<sub>つ</sub>ぱくな<sub>つ</sub>た(不<sub>味</sub>い)酒」とい<sub>う</sub>意<sub>味</sub>もある。売<sub>れ</sub>残<sub>つ</sub>た酒<sub>は</sub>、長<sub>期</sub>間<sub>放</sub>置<sub>し</sub>てお<sub>く</sub>と、酸<sub>つ</sub>ぱくなり、品<sub>質</sub>が劣<sub>化</sub>し<sub>た</sub>から<sub>である</sub>。例<sub>え</sub>ば、「狗<sub>猛</sub>酒<sub>酸</sub>」(酒<sub>屋</sub>の番<sub>犬</sub>が猛<sub>威</sub>を振<sub>る</sub>う<sub>と</sub>、酒<sub>は</sub>売<sub>れ</sub>ず<sub>に</sub>酸<sub>つ</sub>ぱくなる)とい<sub>う</sub>成<sub>語</sub>がある(『韓<sub>非</sub>子』「外<sub>儲</sub>説<sub>篇</sub>右<sub>上</sub>」)。

○殺 [yāo] = (酒<sub>の</sub>)肴。酒<sub>と</sub>一<sub>緒</sub>に食<sub>べ</sub>る<sub>お</sub>か<sub>ず</sub>。「殺 [xiào]」には「混<sub>ぜ</sub>る」とい<sub>う</sub>意<sub>味</sub>もある<sub>が</sub>、こ<sub>こ</sub>は「肴 [yāo]」と同<sub>義</sub>。○腐<sub>菜</sub> [fǔ cài] = 「豆腐<sub>や</sub>野菜」の意<sub>だ</sub>し、中国<sub>資</sub>料<sub>の</sub>用<sub>例</sub>未<sub>詳</sub>。左<sub>訓</sub>「トウ<sub>フ</sub>ナ」(豆腐<sub>・</sub>菜)。○湏<sub>要</sub> [xū yào] = 必<sub>ず</sub>く<sub>で</sub>な<sub>け</sub>れ<sub>ば</sub>な<sub>ら</sub>ない。意<sub>の</sub>助<sub>動</sub>詞<sub>として</sub>も用<sub>い</sub>ら<sub>れ</sub>る<sub>が</sub>、こ<sub>こ</sub>は「必<sub>ず</sub>」「き<sub>つ</sub>と」とい<sub>う</sub>意<sub>味</sub>なら<sub>ない</sub>」意<sub>の</sub>助<sub>動</sub>詞<sub>として</sub>も用<sub>い</sub>ら<sub>れ</sub>る<sub>が</sub>、こ<sub>こ</sub>は「必<sub>ず</sub>」「き<sub>つ</sub>と」とい<sub>う</sub>意<sub>味</sub>の副<sub>詞</sub>。現代<sub>中</sub>国<sub>語</sub>「一定 [yíding]」と同<sub>じ</sub>。和<sub>刻</sub>本<sub>は</sub>、「湏」字<sub>に</sub>右<sub>傍</sub>訓「カナ<sub>ラ</sub>ズ」を附<sub>す</sub>。○少<sub>頃</sub> [shǎoqǐng] = しば<sub>ら</sub>く(の<sub>間</sub>)。○菜<sub>中</sub>可<sub>要</sub>着<sub>醋</sub> = 野菜<sub>料</sub>理<sub>に</sub>酢<sub>を</sub>か<sub>け</sub>ま<sub>し</sub>よう<sub>か</sub>。直<sub>訳</sub>は、「菜<sub>っ</sub>葉<sub>の</sub>な<sub>か</sub>に、ぜ<sub>ひ</sub>とも酢<sub>を</sub>入<sub>れ</sub>たい<sub>と</sub>思<sub>い</sub>ま<sub>す</sub>か。」「可 [kě]」は、軽<sub>く</sub>意<sub>味</sub>を強<sub>め</sub>る副<sub>詞</sub>。「ぜ<sub>ひ</sub>とも」と訳<sub>す</sub>のは、む<sub>し</sub>ろ<sub>少</sub>し強<sub>す</sub>ぎ<sub>る</sub>程

「(酒に) ドボドボと水を入れる、それが『酒のお父ちゃん(酒爺)』というものにもなるのかな。」

その人は言う。

「そういうことならば、あなたの店の酒は、お父ちゃんばかりで、お母ちゃんはちょっとしか入っていない、ということになりますな。」

【訳者注】この店の酒は、水で薄めたまずい酒(淡酒)ばかりだと皮肉を言っているのである。

## 注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二一九丁表)。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部(第二二〇話、一五丁裏)。○酒娘 [jūniàng] = 酒釀 [jūniàng]「酒釀(釀) [jūniàng]」(南方語)。なお、現代中国語では「酒釀 [jūniàng]」と発音する。酒を醱酵させる酒麴のこと。「酒」を「釀 [niàng]」(醱酵)させるものだから、「酒娘」「酒釀」と言う。中国北方では「江米酒 [jiāngmǐjiǔ]」「醪糟 [lāozāo]」と言う。また、中国語「娘 [niàng]」は「お母ちゃん」を意味するため、「酒娘」は「酒のお母ちゃん」「酒 [jiǔ]」という名前のお母ちゃんという意味にも聞こえる。ちなみに、酒を生み出す麴(酒麴 [jiǔqū])を、中国語では「酒母 [jiǔmǔ]」とも言う。左訓「モトザケ」。和語「モトザケ」については未詳だが、「酒を醱酵させる、もとになる成分」「麴」「原酒」を指すと思われる。○叫做 [jiào zuò] = 〓と呼びなす。〓と言う。「叫」は「叫」の異体字。「A叫做B」(AをBと言う)という言い方は、現代中国語でも、名前を説明するとき用いられる、最も一般的な表現である。○糯米 [nuòmǐ] = 餅米。「江米 [jiāngmǐ]」とも言う。○酒藥 [jiǔ yào] = (甘酒を造る) 麴。「酒娘」と同じ。「藥」は「藥」の本字。○漿 [jiāng] = 濃厚な液体。濃厚な汁。○既 [jì] = すでに〓であるからには多く「就 [jiù]」「也 [yě]」「還 [hái]」と呼応するが、この文章では、疑問詞「為甚(どうして)」が受けている。○為甚 [wéishén] = なぜ。どうして。現代中国語「为什么 [wéishénme]」と同じ。左訓「ナゼニ」(何故に)。○酒爺 [jiǔ yé] = 酒のお父ちゃん。「爺」は「娘」と対になる語。中国語では、「父母」のことを「爺娘 [yēniàng]」(旧白話)または「爹娘 [diēniàng]」と言う。○放水下套 [fàng shuǐ xiàtǎo] = (上から下に向かって) ドボドボと水を入れる。水を流し込む。〓については、お父ちゃんが小便を垂れ流す

イメージとつながっている。「套」は「去」の本字。「放 [fàng]」は、「〓を入れる」「〓を放出する」意の動詞。「下去 [xiàqù]」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果、物(目的語)が下の方へ移動していくことを表す複合方向補語。現代中国語と同じ。和刻本は、「放」に左訓「イレ」(入れ)を附す。

## 補注

この話は、原本『笑林評』『絶纒三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

## 余説

第九〇話「売淡酒」から、「術業部」最終話の第九五話「炙罈」までの計六話は、すべて酒屋をからかった話である。

本話(第九二話「酒娘」)は、「酒の母ちゃん」という言葉があるくらいならば、「酒の父ちゃん」という言葉があってもよさそうなものじゃが、と言われ、母ちゃんが酒を醸し出す麴ならば、おしっこをシトシト垂らす父ちゃんは、さしずめ酒に入れる水といったところであろう、と言う。そしてそれならば、あなたの店の酒は、父ちゃんばかりで母ちゃんが少ない、と嫌味を言われる、という話である。

阿漕な商売を営む売れない酒屋は、酒を水で薄めたり(第九〇話「売淡酒」)、水を酒という名前で売ったり(第九一話「三名斬」)していたが、本話の酒屋も、やはり父ちゃん(水)ばかり入れた薄い酒(淡酒)を売っていた、というわけである。

なお、「酒娘 [jūniàng]」という語は、意味的には「酒釀(釀・醸) [jūniàng]」と書かれるべきものであり、「酒娘」という表記は、同音語による当て字である。しかし、中国人が文字を目で見るとは、耳で聞いた場合、「niàng」という音は、日常的に極めて頻繁に用いられる「娘」(お母ちゃん)という語の意味に引き寄せられてしまうのも自然である。その意味では、本話もやはり、「niàng」という語のもつ中国語の両義性を利用したダジャレの一つであり、やはり中国語研究のエキスパートであった遠山荷塘好みの話柄である。

庵筆記』(一二〜三世紀)を経て、『方言別録』(一九一一年成)に至るまで、蘇州周辺地域(呉)の人々は、「茄子」のことを「落蘇」とも呼んでいたということである。○那天灾人禍的 [nà tiānzāi rénhuò de] = あの罰当たりめが。あん畜生が。あのすつとこどっこいめが(罵詈)。「灾」は「災」の異体字。『儒林外史』第二〇回に

「総是你這天災人禍的。把我一個嬌滴滴的女兒生生的送死了。」(おまえさんてひとはほんとに魔物だよ! 私のかわいい娘をとうとう殺してしまつて!)とある(日本語訳の引用は、中国古典文学大系43『儒林外史』(稲田孝氏訳、平凡社、一九六八年一〇月、一八七頁)に拠る)。和刻本は、「天灾人禍」に左訓「ニクイワルモノ」(憎い悪者)を附す。○放了幾粒米。把我来當酒賣。|| 何粒か米を入れて、私(=水)を酒として売ろうとする。「放 [fàng]」は、「(物)をくに入れる」意の動詞。和刻本は、「放了」に左訓「イレテ」(入れて)を附す。「来 [lái]」は、動詞の前に置かれ、その動作に積極的に取り組む姿勢を示す。和刻本は、「来」に「バ」という右傍訓を附し、「把我来當酒賣」(我ヲバ酒ニ當テ、賣ル)と読ませている。原文「来」に込められた積極性を、係助詞「バ」(格助詞「ヲ」+係助詞「ハ」の連濁したもの)に当てた巧みな施訓と言えよう。なお、「當」は「当」の本字、「賣」は「売」の本字である。

補注  
この話は、原本『笑林評』「絶纓三笑」『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説  
第九〇話「売淡酒」に引き続き、本話も、水で薄めたまずい酒を売ろうとする阿漕な酒屋をからかったもの。「名前を二つ持つ者は流罪、名前を三つ持つ者は打ち首」という、恐ろしくも新しい決まりができたため、呉方言で「落蘇」とも呼ばれる「茄子」は、流罪を恐れて水の中に身を隠す。すると水は、それなら自分は打ち首の刑に処されねばならぬと言う。その意は、水には「水」「湯」「酒」という、三つの名前があるから、ということである。

やや捻りが加わっているが、この話の「笑いのツボ」は、この時代の酒屋が「水のような酒」を売っている、否、もはや「水のような薄い酒(淡酒)」を売っているところの騒ぎではない。酒屋の野郎は「酒」という名前で、米粒を入れた「水」を売っ

ているのではないかと、酒屋の不正を痛烈に弾劾しているところにある。捻られている分、阿漕な酒屋に対する皮肉は、前話にも増して辛辣である。

⑨酒娘 (酒を醸酵させるお母ちゃん)

原文

酒娘

人問フ何<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>叫<sub>二</sub>做<sub>一</sub>酒娘<sub>ト</sub>。答<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。糯米<sub>ニ</sub>加<sub>二</sub>酒藥<sub>ヲ</sub>成<sub>レ</sub>漿<sub>ヲ</sub>。便<sub>チ</sub>是<sub>レ</sub>也。又<sub>タ</sub>問<sub>フ</sub>。既<sub>ニ</sub>有<sub>二</sub>酒娘<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>甚<sub>チ</sub>没<sub>二</sub>有<sub>一</sub>酒爺<sub>ト</sub>。答<sub>曰</sub>。放水<sub>ヲ</sub>下<sub>シ</sub>忒<sub>ル</sub>。就是<sub>レ</sub>酒爺<sub>也</sub>。其<sub>ノ</sub>人<sub>曰</sub>。若<sub>シ</sub>如此<sub>ノ</sub>說<sub>カハ</sub>。你<sub>家</sub>的<sub>酒</sub>。是<sub>レ</sub>爺<sub>多</sub>ク娘<sub>少</sub>的<sub>了</sub>。

書き下し文

酒娘

人問ふ何為ぞ酒娘と叫び做す。答て曰く。糯米に酒薬を加へ漿を成す便ち是なり。又問ふ。既に酒娘有り。甚を為して酒爺没有。答て曰く。水を放し下し去る。就ち是酒爺なり。其の人曰く。若し此の如く説かば。あなたの家の酒は。是爺多く娘少きのなり。

現代語訳

ある人が質問した。

「どうして(酒を醸酵させる)麴を(『酒娘 [juniàng]』)と言つのですか。」

答えて言う。

「餅米に麴を加えると、『娘 [niàng]』=『釀(釀) [niàng]』=『釀造(醸酵が進み)』どころとした液体ができあがります。だから、『酒を醸すもの』という意味を込めて、『酒娘 [juniàng]』と言つのです。」

すると、また質問した。

「『酒を醸し出すお母ちゃん』という意味の『酒娘』という言葉がありますのに、どうして『酒のお父ちゃん(酒爺)』というものは、ないのでしょね。」

答えて言う。

書き下し文

三名斬

朝廷てうてい 新あらたに一例いちれいをひらく。凡およそ物もの 兩名りやうめい 有ある者は軍ぐんに充あつ。三名さんめいの者ものは斬ざんす。茄子なす 自らみづか 双名さうめいなるを覚おぼえ。水中すいちゆうに 躲たご在ざいす。水みづ 問とひて曰いはく。你なんぢ 来きたる 何なにを為なす。茄なす曰いはく。朝廷てうていの 新例しんれいを 避さく。我われに 兩名りやうめい 有あり。一名いちめいは茄子なす。一名いちめいは落蘇らくそなるに因よつて説とく。水みづ 曰いはく。若もし是これ 這等じやうとうならば。我われ 該たがへ 斬ざんすべし。一名いちめいは水みづ、二名にめいは湯ゆ。又また 那かの天災てんさい人禍じんかの 的ありて。幾粒いくつぶの米こめを放はなつして。我われをば 酒さけに当あてて 売うる。

現代語訳

朝廷は新たに一つの条例を制定し、ありとあらゆる事物に対し、二つの名前を持つ者は「充軍(辺境の地へ流罪の上、苦役を課す)」に処し、三つの名前を持つ者は「斬(打ち首の刑)」に処すこととした。茄子は、自分には二つの名前があると考え(流罪にされては堪らないと思い)、水の中に身を隠した。水は、訊ねた。

「茄子君、水の中になんぞやって来て、どうしたんだい。」

茄子は、言った。

「朝廷が定めた新しい条例から逃れるためさ。だって、私には『茄子 [qiezi]』という名前と、『落蘇 [luosu]』という、二つの名前があるんだもの。」

水は、言った。

「もしもそういうことなら、私などは、打ち首の刑に処されなければなりませんまい。

一つ目の名前が『水』であり、またの名前が『湯』であり、そしてまた、あの罰当たりのこん畜生めが、米粒をバラバラと入れて、私を『酒』という名前で売っているのじゃからな。」

【訳者注】「あの罰当たりのこん畜生(＝酒屋の野郎)は、『酒』と称して

「水」を売っている、ということ。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部(二八丁裏)。『新鵜笑林広記』巻之三・術業部(第二〇九話、一五丁表)。○新開一例 [xin kai yi] = 新たに一つの条例(決まり)を作っ

た。「先例をつくる」ことを「開例 [kai li]」と言ひ、「先例に倣う」ことを「援例 [yuan li]」と言ふ。第五七話「納粟詩」に「援例」という語の用例がある(拙稿『訳解笑林広記』全注釈(五))を参照)。○充軍 [chong jun] = 明清時代の最も重い流刑。僻遠の地に流し、兵營で苦役に従事させる刑罰。『儒林外史』第一三回に「他家裡交結欽犯。藏着欽賊。若還首出來。就是殺頭充軍的罪。他還敢怎樣你。」(遷家じゃ重罪人と行き来があり、その所持品をかくしていたとあれば、われわれが訴えて出りや、たちどころに死刑か流罪よ。あいつはおまえをどうにもできやしねえやな!)とある(日本語訳の引用は、中国古典文学大系43『儒林外史』(稲田孝訳、平凡社、一九六八年一〇月、一三二頁)に拠る)。和刻本は、「充」の字形が微妙に異なるが、今、中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊本)に従つた。○斬 [zhan] = 斬首、打ち首の刑。○雙名 [shuang ming] = 二つの名前。「雙」は「雙」の略字。「雙」は「双」の本字。意味は、直前の「兩名 [liang ming]」と同じ。中国原本も和刻本も「雙」に作る。○躲在水中 [duo zai shui zhong] = 水中に身を隠した。「躲」は、「逃げる」「隠れる」意の動詞。「在」は、動詞の後ろに置かれ、動作の結果、ある場所にいることを表す結果補語。現代中国語と同じ。和刻本は、「躲」字に左訓「ニゲル」(逃げる)を附す。○為何 [we he] = なぜ。どうして。現代中国語「为何 [wei she neng]」と同じ。○因就 = 不詳。中国原本(京大本)は「因説」に作るがこの語についても不詳。文脈から判断すれば、「因爲 [yin wei]」(なぜなら)だからである)とあるべきところ。今、中国原本(京大本)の表記「因説」に従つて書き下し、「因爲」の意味で解釈しておく。○落蘇 [luosu] = 茄子の異名(吳方言。南宋・陸游(一一二五〜一二二〇)の随筆『老学庵筆記』卷二に「西陽雜俎云。茄子一名落蘇。今吳人正謂之落蘇。或云。錢王有子跛足。以声相近。故惡人言茄子。亦未必然。」(『西陽雜俎』(卷十九)に「茄子、一名を落蘇」とあるが、現在まさしく吳地方の人は「茄子」のことを「落蘇」と呼んでいる。またある人は、錢王には跛(跛足)の息子がいたが、「跛」を意味する「跛足」と、「茄子」を意味する「落蘇」とは)発音が近かったので、これを嘲つて「茄子野郎」と呼んだと言う。あるいはそういうことかもしれない。(拙訳)とあり、張慎儀『方言別録』卷上之二(一九一一年成)も、『老学庵筆記』を引き、「今吳人正謂之落蘇」(今でも吳の人は「茄子」のことを「落蘇」と言う)と記している。『西陽雜俎』(九世紀成)の時代から、『老学

の鳥、あなたはそれを追い払って、どうしようと言うのですか。」となる。和刻本の訓読「此レ二鳥ヲ」は、ややニュアンスが異なるため、私に読み下した。和刻本は「怎的」に左訓「ナニ、スル」(何にする)を附す。○吃虧「chīkuī」= 損をする。損害を被る。ここでは、シラサギとセイランという二種の水鳥が「下水「xīshuǐ」= 水面に下りる」「水に入る」せいで、(酒が水っぽくなり、酒が売れないという) 損害を被っている、という意味。左訓「オカゲデ」(御蔭で)。この「オカゲデ」は反語的用法。「〜のおかげで(よい目にあつた)」という意味の場合、「多虧「duōkuī」」「幸虧「xìngkuī」という語を使用する。○會「huì」= 「會」の本字。(技能を習得して)「〜することができる」意を表す助動詞。現代中国語と同じ。ここでは、水鳥は空を飛ぶだけでなく、水面に下りることも「できる」意。和刻本は、「會」字に右傍訓「ヨク」を附す。○遣退了他「qiāntuī le tā」= その二種の水鳥を追い払ってしまえば。「他「tā」は、三人称代名詞。近代以前の中国語では、「他」「她」「它」を区別しない。また、単数複数の区別もそれほど厳密ではない。この「他」は、現代中国語では「它們「tāmēn」と言うべきところ。左訓「コノトリヲハラヘバ」(この鳥を払へば)。○包你就賣得去「(酒が) 売れることを、あなたに保証します。酒が売りさばかれることを、(私が) 請け合います。「包「bāo」は、「全責任を負う」「保証する」「請け合う」意。現代中国語と同じ。和刻本は、「包你」に左訓「ウケアフテ」(請け合ふて)を附す。和刻本は、この二語を「包「你」と訓読しているが、「動詞(包) + 人称代名詞(你)」(あなたに請け合う)という、品詞を異にする二語に連字符号を附し、「包「你」と音読させるのは、極めて珍しい。○賣得去「mài de qu」= 売れる。売りさばくことができる。「賣不去」の反義語。方向補語の可能形(可能補語)。「賣」は「売」の本字。「賣不去」の注を参照。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

仕立屋の次は、酒屋の話。この話は、売れない酒屋が、祈禱師にお祓いを依頼したところ、「先除鷺鷥、後去青鸞。」(まずはシラサギを取り除き、次にセイランを追い

払え。)というお告げを得た。どういふことかと訊ねると、これらの鳥は、水鳥なので、「会下水」= 水に飛び降りることが出来る」から、これまで酒屋は損害を被っていたのだと言う。さて、その意は、これまでこの酒屋は、水鳥が「水に入っていた(下水)」から、つまり、酒の中に「水を入れていた(下水)」から、酒がまったく売れなかったのだ、ということ。水で薄めた水くさい酒など、不味くてとても飲めたものではない。酒が売れないのは、この酒屋の売ろうとしていた酒が、水で薄めた酒(「淡酒」)だったからであり、実は貧乏神に取り憑かれていたせいではなかった。文字通り、「水増し」した欠陥商品である「淡酒」を売ろうとする、その詐欺師まがいの悪徳商法にこそ、問題があったのである。本話の真意は、実は、粗悪な欠陥品を売りどばし、客から金を騙し取ろうとした当時の酒屋の、その詐欺的商法を摘発し、擲擻するところにあつたように思われる。

とはいえ、この話の「笑いのツボ」は、やはり「下水「xīshuǐ」という中国語の両義性(掛詞、地口、ダジャレ)をうまく利用したところにある。つまり、「下水「xīshuǐ」には、「水鳥が」水に入る」という意味と、「酒に」水を入れる」という二つの意味があり、この酒屋の酒は「下水「xīshuǐ」だから売れないのだ、と言っているのである。またしても、中国語研究のエキスパートであつた、遠山荷塘好みの中国語音ネタと言つてよい。

⑨三名斬(三つの名前を持つ者は、打ち首の刑に処す)  
原文  
三名斬

朝廷新開一例。凡物有兩名者ハ充軍。三名者ハ斬。茄子自覺二渡名。一在ス水中。水問曰ク。你来為何。茄曰ク。避朝廷新例。因三就。我有兩名。一名茄子。一名落蘇。水曰ク。若是這等ナラハ。我ト該斬了。一名水。二名湯。又有三那。天一人禍的。放丁。幾粒ノ米。把。我來當。酒三賣。

「[taolao]」などと、可笑しな言い訳をしているところにある。頭の固さを「嫩」「老」という語彙によって形容することの可笑しきは、やはり中国語を母語としない外国人には、理解しにくいところかもしれない。日本語で読んで面白くなくても、中国語ネイティブの読者には、もう少し受ける可能性がある、という意味である。

⑨ 売淡酒 (水で薄めた酒を売る)

原文

賣淡酒

一 家做酒、頗賣不<sub>レ</sub>去。以<sub>テ</sub>為<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>耗神。請<sub>フ</sub>一先生<sub>ニ</sub>燒<sub>レ</sub>楮<sub>ヲ</sub>退<sub>レ</sub>送。口<sub>ニ</sub>唸<sub>シ</sub>曰<sub>ク</sub>。先除<sub>ニ</sub>鷺鷥<sub>ヲ</sub>。後<sub>ニ</sub>去<sub>ニ</sub>青鷺<sub>ヲ</sub>。主人曰<sub>ク</sub>。此<sub>レ</sub>二<sub>ニ</sub>鳥<sub>ナリ</sub>你<sub>ニ</sub>退<sub>レ</sub>送<sub>ニ</sub>他<sub>ヲ</sub>。怎<sub>ニ</sub>的<sub>ナリ</sub>。先生曰<sub>ク</sub>。你不<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>、都<sub>ニ</sub>吃<sub>ニ</sub>虧<sub>ス</sub>這<sub>ノ</sub>兩<sub>ニ</sub>隻<sub>ニ</sub>禽<sub>ニ</sub>鳥<sub>ヲ</sub>會<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>水。遣<sub>ニ</sub>退<sub>レ</sub>他<sub>ヲ</sub>。包<sub>ニ</sub>你<sub>ニ</sub>就<sub>ニ</sub>賣<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>去<sub>ラ</sub>。

書き下し文

淡酒を売る

一 酒を造る、頗る売れ去らず。以て家に耗神有りとなし。一先生を請ふて楮を焼て退送す。口に唸して曰く。先鷺鷥を除き。後青鷺を去ん。主人曰く。此の二鳥、你を退送して怎的。先生曰く。你知らず、都この兩隻の禽鳥會水に下るを吃虧す。他を遣退せば。包你して就ち売れ得去らん。

現代語訳

ある酒屋さん、まったく酒が売れないので、この家は貧乏神にでも取り憑かれていたのではないかと考えた。そこで、道士の先生を呼び、(呪術の儀式として)紙を焼いて、悪霊を退散してもらおうことにした。(道士の先生は)呪文を唱えるように、ぶつぶつと言った。

「まずはシラサギを取り除き、次にセイランを追い払え。(先除鷺鷥、後去青鷺)」「酒屋の主人は、言った。

「この二種の鳥を追い払えば、それでどうなると言うのです。」

道士の先生は、言った。

「おぬしは知らんようじやな。すべてはな、この二羽の鳥が水に入っていたおかげで、おぬしは損害を被っておったのじゃ。これらの鳥を追い払えば、(鳥が水に入るように、酒にも水が入って、水っぽい薄い酒になることはない)から、これからは、次から次へと飛ぶように)酒が売れることじやろう。それは、このわしが保証してやる。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部(二八丁表裏)。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部(第二〇八話、一五丁表)。○淡酒 [tanjū] 水っぽい酒。薄い酒。水で薄めた酒。○賣不去 [mai buqu] 売れない。売りさばくことができない。「賣」は「売」の本字。動詞の後に置かれる「不去」は、その動作の結果、物が遠くへ離れていくことができない意を表す(方向補語の不可能形)。ここでは、売り物が手元から離れていかない、という意味。なお、本話の最後に用いられている「賣得去」は「賣不去」の反義語であり、物が手元から離れていくことを示す(可能補語)。現代中国語と同じ。○以爲 [yiwéi] 〓 〓 と思う。〓 〓 と考える。〓 〓 と見なす。現代中国語と同じ。○耗神 [hàoshén] 〓 〓 「貧乏神」を指すと思われるが、中国文学関連資料の用例未詳。「耗」は「消耗する」「無駄にする」「使い果たす」意。和刻本は「以為家有耗神」に左訓「ピンボウガミガアルトオモフ(貧乏神があると思ふ)を附す。○請一先生燒楮退送(加持祈禱の術に長けた道士の)先生にお願いして、紙を焼き(貧乏神を)追い払ってもらうことにした。「楮 [chǔ]」は、クワ科の落葉低木、カジノキ。樹皮が紙の原料になることから、「紙」の異称として用いられる。和刻本は、「一先生」に「キタウシヤ(祈禱者)」「楮」に「ハクガミ(白紙)」「退送」に「ハラフ(祓ふ)の左訓を附す。○唸 [niàn] 〓 〓 声を出して読む。唱える。左訓「トナヘテ(唱へて)。○鷺鷥 [lǚ] 〓 〓 鳥の名。シラサギ。コサギ。体長は大型のものは約九〇cm、小型のものは約五〇cm。「白鷺 [bái]」とも言う。和刻本は「鷺」字を「鷺」に誤る。今、中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊本)により改めた。○青鷺 [qīnglǚ] 〓 〓 「山海經」にも登場する、鳳凰に似た伝説上の神鳥を指す場合もあるが、ここは、キジ目キジ科に属する鳥、セイラン(青鷺)のこと。中国原本も和刻本も「鷺」に作るが、「鷺」は「鷺」の略字。○此二鳥你退送他怎的。〓 〓 直訳すれば、「この二種

又(頭を剃る)

ある理容師、床屋で頭を剃る仕事を習い始めた。剃刀で頭に切り傷を拵えるたびに、傷口を指で一つずつ押さえていった。ところが、傷口があまりにも多すぎて、しまいは指で掩いきれなくなり、頭を振って、こう言った。「これは、これは、なんて難しいんじや。千手観音のように、手が千本くらいないと、こりゃあ、どうにもならんわい。」

(編者のコメント)(また、次のような話も伝わっている。)理容師が頭を剃るようになった。ところが、剃刀を動かした始めた途端、客の頭は傷だらけになってしまった。そこで、(理容師は)その場を離れながら、床屋の主人に、こう言った。「この頭は、まだ若くてフニャフニャだから、しばらくこのまま置いておきます。しばらくすれば、きつと頭の皮が固まって、千手観音の力を借りなくても済むようになるでしょうから。」

唐本『笑府』第二〇六話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻五・広萃部、筑波大学中央図書館蔵本、一三丁裏)

又(待詔剃頭)

一待詔初學剃頭。毎刀傷一處。則以一指掩之。已而傷多。不勝其掩。乃曰。原來剃頭、恁難。湏得千手觀音、纔好。

待詔剃頭纔舉手。所傷甚多。乃辭主家曰。此頭尚嫩。姑再俟之。

また、この話は、和刻本『解顔新話』(寛政六年(一七九四)序)に収録され、その和訳部分の板本が、小咄本『即当笑合』(寛政八年(一七九六)序)に、ほぼそのままの形で流用されている(本話の場合、表題のルビを追加している)。

『解顔新話』および『即当笑合』の原文は以下の通りである。いずれも、原文の引用は、京都大学附属図書館蔵本に拠る。

和刻本『解顔新話』第三六話「頭嫩」(寛政六年(一七九四)序、京都大学附属図書館蔵本、下巻、一〇丁裏〜一二丁表)

頭嫩

一待詔替人剃頭纔舉手便所傷甚多乃  
停剃刀辭主人曰此頭尚嫩下不<sub>レ</sub>得刀且過  
幾時姑俟其老々再剃罷

待詔人の頭を剃る 纔 手を拵ると傷だらけにする  
乃ち 刀を停ていはくこの頭まだ嫩で刀が下られ  
ませぬ 且しばらくして老々から再剃ませふ

和刻本『即当笑合』第七〇話「頭嫩」(寛政八年(一七九六)序、京都大学附属図書館蔵本、巻四、一〇丁裏〜一二丁表)

頭嫩

待詔人の頭を剃る 纔 手を拵ると傷だらけにする  
乃ち 刀を停ていはくこの頭まだ嫩で刀が下られ  
ませぬ 且しばらくして老々から再剃ませふ

なお、『解顔新話』については、拙稿『解顔新話』全注釈(平成二二年度〜平成二三年度 科学研究費補助金 研究成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」課題番号二一五二〇二二五、一〇一〜一〇三頁)に詳しい。

余説

この話は、人の頭を剃るのが仕事であるにも関わらず、剃刀さばきの下手な理容師をからかったもの。第八六話「有進益」、第八七話「裁縫」、第八八話「不下剪」において、阿漕な商売を営む仕立屋をからかった後、今度は床屋の失態を笑う、というわけである。

この話の「笑いのツボ」は、自分が剃刀で傷だらけにした客の頭を「若くてフニャフニャ(「嫩[nen]」)であると言ひ、傷だらけのその頭をしばらく放っておいたら、そのうち「時間の経過とともに固くなる」年を取って頭の皮が厚くなる(「老々

め主人に辞して曰く。此の頭尚嫩なり。刀を下し得ず。且幾時を過し。姑  
く其の老々を俟て 再び剃ん。

現代語訳

ある理容師、お客さんの頭を剃ることになった。ところが、剃り始めた途端、お客  
さんの頭は、あつという間に傷だらけになってしまった。そこで、剃刀の手を止め、  
その場を離れながら、床屋の主人に、こう言った。

「この頭は、まだ若くてフニャフニャだから、剃刀を当てる事ができません。し  
ばらく時間をおいて、頭がカチカチに固まってから、また剃ることにいたしましょう。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二八丁表)。『新編笑林広記』卷之三・術業部  
(第二〇一話、一三三丁裏)。○嫩 [nèn] 若い。柔らかい。(新芽が) 青い。本文中の  
「嫩」字に、左訓「ワカシ」(若し)を附す。○待詔 [dāizhào] 床屋。理髪店。髪結い。  
左訓「カミユヒ」(髪結ひ)。○替 [dì] 〓〓のために(…してあげる)意の前置詞(介  
詞)。現代中国語の「給」[gěi]と同じ。和刻本は右傍訓「タメニ」を附す。○剃頭 [cǎi]  
〓〓 〓 〓頭を剃る。散髪する。清代の中国では、頭の周囲の髪を剃り、中央部分に残し  
た髪を編んで後ろに垂らす「辮髪」と呼ばれる髪型が、すべての男子に強要された。「剃  
頭」とは、辮髪スタイルの髪型を作るために、頭の周囲を剃刀で剃り上げることと言う。  
左訓「アタマソル」(頭剃る)。○纒 [cǎi] 〓〓「たった今」〓〓したばかり」という意味  
の副詞。現代中国語「纒(才)」と同じ。和刻本は、右傍訓「マサニ」を附すが、や  
や意味がずれる。通常は「わづかに」と訓読する。○舉手 [jǔ shǒu] 〓〓手を挙げる。「舉  
は」(舉(挙))の異体字。左訓「ソリカ、リ」(剃りかかり)。○辞 [cí] 〓〓別れを告げる。  
お暇する。その場を離れる。○下不得刀 [xià bu de dāo] 〓〓剃刀を当てる事ができ  
ない。頭を剃ることができない。動詞の後に置かれる「不得」は、その動作ができな  
いことを表す、結果補語の不可能形。現代中国語と同じ。左訓「ソラレヌ」(剃られぬ)。  
○且 [qiě] 〓〓しばらく。ひとまず。まあ。○過幾時 [guo jǐ shí] 〓〓しばらく時間が経っ  
てから。左訓「シバラクタツテ」(しばらく経つて)。○姑俟其老々再剃罷 〓〓しばらく  
時間が経って、頭(の皮)が、柔らかいフニャフニャした状態から、カチカチの硬い

状態になるのを待つてから、もう一度改めて、剃刀を当ててみましょう。「老 [lǎo]」  
(長い時間を経過している、成長している、年を取っている)は、「嫩 [nèn]」(生ま  
れて間もない、若い、柔らかい)の対義語。「罷 [pà]」は、文末に置かれる語気助詞で、  
命令文の口調を和らげる働きがある。日本語「〓〓しようよ」「〓〓しようよ」のニュ  
アンスに近い。和刻本は、「老々」に左訓「ヒネルノヲ」、「剃罷」に左訓「ソリマセフ」(剃  
りませふ)を附す。「ヒネル」は、「年を経る」「古くなる」「子どもが大人っぽくなる」  
意。「ひねくれる」と語源は同じ。

補注

この話は、『絶纒三笑』卷二時笑・外語一一〇(第二〇〇話)又(剃頭)注、『笑  
府』卷五・広萃部(第二〇六話)又(待詔剃頭)注に類話がある。『笑府』の日本  
語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』(岩波文庫、一九八三年一月、一八二頁)を参照。  
『絶纒三笑』には拙訳を添える。

『絶纒三笑』『笑府』『笑林広記』は、それぞれ僅かずつ、文字に異同がある。『絶  
纒三笑』『笑府』の二書は、ほぼ同文と言えるだろうが、『絶纒三笑』に見える最後  
の一言「然則必是老頭皮。方可不煩觀音力耳」(しばらくすれば、きつと頭の皮が固まっ  
て、亲手観音の力を借りなくても済むようになるでしょうから。)が、『笑府』では削  
除されている。

唐本『絶纒三笑』第二〇〇話(明・万曆四四年(一六一六)序、卷二、時笑・  
外語一一〇、東京大学文学部蔵本、五八丁表)

又(剃頭)

一待詔初學剃頭。每刀傷一處。則以一指掩之。  
已而傷多。不勝其掩。搔首曰。難難難。須得亲手。  
觀音纒好。  
待詔剃頭。纒舉手。所傷甚多。乃辭主家曰。此  
頭尚嫩。姑再俟之。然則必是老頭皮。方可不  
煩觀音力耳。

(〜する)。左訓「クリカヘシ」(繰り返し)。○量スル久シ [liang ju] 長い間、ずっと寸法を測っていた。和刻本は「量久シ」(量る久し)と訓読するが、一般的な漢文訓読法に従い、「量ること久し」と書き下しておいた。和刻本は「量」字に左訓「モノサシニテサス」(物差しにて差す)を附す。○不肯 [bù kǎn] すすんで〜しようとしない。〜することを承知しない。○下剪 [xià jiǎn] 〓ハサミを入れる。ハサミで切る。和刻本は「剪」字に左訓「ハサミ」を附す。○有了他的。便没有了我的。有了我的。又没有了他的。 〓お客さんの分を切り取ると、私の分がなくなってしまうし、私の分を切り取ると、今度はまたお客さんの分がなくなってしまう。動詞の後ろに置かれる「了」[le]は、動作の完了を表すアスペクト助詞。「(お客さんの分をあるような状態〔有〕にすると)「お客さんの分を残してしまおう」との意。現代中国語と同じ。このような口語的用法は、文言訓読のために作られた漢文訓読の方法で処理することは難しい。和刻本も、明確な訓読法を示さず、左訓に和訳を添えることで処理している。和刻本は、「他的」に左訓「カレノ、ガ」、「没有」に左訓「ナクナル」を附す。

補注

この話は、『絶纓三笑』第四一〇話(巻三、時笑・影語四八)の注に類話がある。『絶纓三笑』所収の本文は、次の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同がある。なお、『絶纓三笑』第四一〇話(正文)は、『訳解笑林広記』第八七話「裁縫」(『新鐫笑林広記』第一九四話)とほぼ同文である。『絶纓三笑』の日本語訳(拙訳)は、第八七話「裁縫」補注を参照。  
和刻本『笑府』に類話はない。

唐本『絶纓三笑』第四一〇話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻三、時笑・

影語四八、東京大学文学部蔵本、二二丁表裏)

裁縫

年早有司令法官祈雨。雨不至有司怒。欲加責。

法官曰。小道本事平常。不如裁縫好。有司問故

曰。他要落一尺就是一尺。

若果用裁縫。又恐是水荒了。○有以三尺布

令裁縫做裏肚者。裁縫將布量了又量。只不動手。問曰布已勾了。如何不做。答曰勾便勾了。只是有了你的。沒了我的。

余説

第八六話「有進益」、第八七話「裁縫」に引き続き、この話も、やはり仕立屋職人からかったもの。前話までは、「要落幾尺。就是幾尺。」(自由自在に好きなだけ、布地の寸法を切り取ることができるといふ成語に捻りを加え、「他人様の物を自由自在に好きなだけ、毎日少しずつ掠め取っている」などを皮肉ったり、「仕立屋は、自由自在に布地を裁つことができるのだから、同じように好きなだけ、雨を降らせることもできるだろう」などと巧みな掛詞を操って上手いことを言う話であったが)ここでは、まさしくそのものスバリ、仕立屋がお客さんの布地を使って自分の服を作ろうとするあくどい手口が暴かれている。

お客さんから提供された布地の寸法を、何度も何度も測りながら、ついに「ううん、うまくいかないなあ、わしの分を取れば、あいつの分が足りなくなるし、あいつの分を取ってしまえば、わしの分が足りなくなる。」と言っているのである。そもそも、他人様の布地を使って、仕立屋が自分の服を作ってよい道理はない。第八六話「有進益」の三番目の娘婿が言っていた通り、この仕立屋は、やはり泥棒(賊)であった。

⑧ 頭嫩 (頭がフニヤフニヤ)  
原文

頭嫩

一待詔。替人剃頭。纔舉手、便所傷甚多。乃停刀。辭主人曰。此頭尚嫩也。下三不得刀。且過幾時。姑俟其老。再剃罷。

書き下し文

頭嫩

一待詔。人の替に剃頭す。纔に拳手、便ち傷する所甚だ多し。乃ち刀を停

としないんだ。」仕立屋は答えた。「十分と言えば十分なのじゃがのう、ただ、あなたの分を作ってしまうと、わしの分がなくなってしまうのじゃ。」

唐本『笑府』第二〇九話（明・泰昌元年（二六二〇）頃成立か、卷五・広萃部、筑波大学中央図書館蔵本、一四丁裏）

裁縫

年早。太府令法官求雨。不至。太府怒。欲責法官。稟云。小道本事平常。不如某裁縫好。太府曰。若何。答曰。他要落一尺。就是一尺。若果用裁縫。又恐是水荒了。

余説

雨を降らせたいなら、道士に加持祈禱をさせるより、仕立屋にやらせた方がよい、という話。その意は、仕立屋だけに、自由自在に「布地を」切り取る（「落」）、「雨を」降らせる（「落」）ことができるから、というもの。

この話は、前話に引き続き、仕立屋の技術を称える成語「要落幾尺。就是幾尺。」（何センチの布地を切り取りたいと思えば、切り取りたい寸法通りに、自由自在に布地を切り取ることができる）に見える「落」字の両義性（「布地を切り取る」「雨を降らせる」）を利用して、「仕立屋ならば、布地と同じように、自由自在に好きなだけ、雨も降らせることができるだろう」と洒落たものである。

例によって、和刻本『訳解笑林広記』の施訓者である遠山荷塘好みの中国語のダジャレであり、日本語訳だけでは、なかなか味わいにくい話であろう。

なお、「道士」とは、道教の修行をする修験者のことであり、その大成者は、天変地異を意のままに操る「仙人」として崇められた。『三国志』に登場する諸葛孔明が、「赤壁の戦い」において、天地神明に祈りを捧げ、季節はずれの東風を吹かせる場面を想起してもよい。

近代以前の中国では、道教の修験者は、天文・気象などの幅広い学問に通じた学者であり、また同時に、呪術的な手腕に長けた超人として、万人に畏れられる存在であった。

た。

都賀庭鐘作の初期読本『英草紙』第二卷「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」（寛延二年（一七四九）刊）の主人公も、道教の修験者として描かれており、「分身隠形」の術を披露する。一読を勧める。

Ⓢ 不下剪（ハサミで切り取ることができない）

原文

不下剪 縫匠裁衣。反覆量久。不肯下剪。徒弟問其故。答曰。有了一了。他的。便没了一了。我的。有了一了。我的。又没了一了。他的。カレノ、カ ナクナル ナクナル ナクナル

書き下し文

剪を下さず 縫匠衣を裁す。反覆量すること久し。肯て剪を下さず。徒弟其の故を問ふ。答て曰く。他的有了一れば。便ち我的没有了。我的有了一れば。又他的没有了。

現代語訳

仕立屋は、服を作るために布を裁断しようとしていたが、長い間、繰り返し繰り返し布の寸法を測り直し、なかなかハサミで切ろうとしなかった。弟子がその理由を訊ねたところ、こう答えた。

「お客さんの分を切り取ろうとすると、私の分がなくなってしまうし、私の分を切り取ろうとすると、今度はまた、お客さんの分がなくなってしまうのじゃ。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部（二八丁表）。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部（第一九五話、一二丁表裏）。○縫匠 [fengjiang] = 仕立屋。テーラー。「裁縫 [caifeng]」と同じ。○裁衣 [cai yi] = 布を裁断し、縫い合わせて衣服を作る。服を仕立てる。和刻本は「裁」字に左訓「タツ」（裁つ）を附す。○反覆 [fanfu] = 何度も。繰り返し

本文と対校すれば、それぞれ僅かに文字の異同はあるが、評語（編者のコメント）を除けば、ほぼ同文である。『笑林評』と『絶纓三笑』も、語句レベルの異同しかないが、以下に拙訳を添えておく。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、一八四頁）を参照。

唐本『笑林評』第七四話（万曆三十九年（一六一二）序、内題「笑林評卷之上」、

外題「笑林評 上」、内閣文庫（国立公文書館）蔵本、二八丁裏）

年早。太府令法官祈雨。雨不至。太府怒。欲責法官。法

官告云。小道本事平常。不如某裁縫好。太府曰若何。

荅云。他要落一尺就是一尺。

焚巫致雨。幾令府公用人于社。

日照りが続いたある年のこと、太府（北魏から元代まで設置されていた寺院関連を司る役所のこと。明代には廃止されていた。）の役人が法官（職位のある道士）に雨乞いを命じたが、雨は降らなかつたので、太府の役人は怒って、法官を処罰しようとした。法官は、次のように申し上げた。

「わたくしの腕前は、ごく普通のものでございます。とても仕立屋の〇〇さんには敵いません。」

太府の役人は、それはどういふことかと訊ねた。そこで、答えて言った。

「あの人は、（布地であろうが雨であろうが）落とそうと思つたら、思つた通りに好きなだけ、思う存分落とすことができますから。（訳者注、「落（落とす）」には、「（布地を）切り取る」「自分のものにする」「（雨を）降らせる」という、三重の意味が掛かっている。）

（編者のコメント）（春秋時代には）巫女を火炙りにして雨乞いをしたと言うが（訳者注、『春秋左氏伝』僖公二十一年）、言ってみれば、それは政府機関のトップが、生贄を差し出させたようなものである。

唐本『絶纓三笑』第四一〇話（明・万曆四四年（一六一六）序、卷三、時笑・

影語四八、東京大学文学部蔵本、二二丁表裏）

#### 裁縫

年早有司令法官祈雨。雨不至有司怒。欲加責。

法官曰。小道本事平常。不如裁縫好。有司問故

曰。他要落一尺就是一尺。

若果用裁縫。又恐是水荒了。○有以三尺布

令裁縫做裹肚者。裁縫將布量了又量。只不

動手。問曰布已勾了。如何不做。答曰勾便勾

了。只是有了你的。沒了我的。

#### 仕立屋

日照りが続いたある年のこと、役人が法官（職位のある道士）に雨乞いを命じたが、雨は降らなかつたので、役人は怒って（法官を）処罰しようとした。法官は言った。

「わたくしの腕前は、ごく普通のものでございます。とても仕立屋には敵いません。」

役人は、それはどういふことかと訊ねた。すると、（法官は）言った。

「仕立屋は、（布地であろうが雨であろうが）落とそうと思つたら、思つた通りに好きなだけ、思う存分落とすことができますから。（訳者注、『笑林評』所収の類話と同じく、「落（落とす）」には、「（布地を）切り取る」「自分のものにする」「（雨を）降らせる」という、三重の意味が掛かっている。）

（編者のコメント）もしも仕立屋に雨乞いをさせたなら、今度はまた水が溢れ出してしまふかもしれない。（訳者注、仕立屋は、他人様の布地を、洪水になるほど大量に「ぼたくくっている」からである。）○（また、次のような話も伝わっている。）三尺（約九〇センチメートル）の布で、仕立屋に腹巻きを作ってもらおうとした人がいた。仕立屋は、何度も何度も布の寸法を測るばかりで、なかなか仕事に取りかからないので、こう訊ねた。「布の長さは、もうそれで十分だろう。どうして作ろう

に言上した。

「わたくしの加持祈禱の腕前は、人並みのものなのでございます。わたくしなどよりも、〇〇という仕立屋さんに雨乞いをしてもらった方がよいと存じます。」

太守は言った。

「それはいい、どういふことじゃ。」

法官は、答えて言った。

「仕立屋の〇〇さんなら、(仕立屋だけに) 思った通りに好きなだけ、布地を裁つことができましようから(=思った通りに好きなだけ、雨を降らせることができましようから)。」

【訳者注】法官の最後の言葉「他要落幾尺。就是幾尺。」は、直訳すると「彼は、

幾尺の布地を切り取ろうと思えば、その思った通りの寸法の布地を切り取ることができる」という意味である。しかし、「落」という文字には「(雨が)落ちてくる」という意味もあることから、この台詞は「雨を何ミリ降らせようと思えば、その思った通りの量の雨を降らせることができる」という意味にも聞こえてしまうことである。北京語をもとに作られた「普通話」(現代中国の標準語)では、「雨が降る」ことを「落雨 [luò yǔ]」とは言わず、「下雨 [xià yǔ]」と言うが、中国南方では、「車を降りる」(下車 [xià chē])」ことを、今でも「落車」と言う。したがって、『笑林広記』が編集された江南地方の中国(南京)では、「落」は「下」と同義に用いられていたのではないかと思われる。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二七丁裏〜二八丁表)。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部(第一九四話、一二丁表)。○裁縫 [cáiféng] ≡ 仕立屋 (第八六話「有進益」に既出)。○時年 [shínián] ≡ 過去のある時期に。昔。以前に。○大旱 [dàhàn] ≡ 大干魃。日照りが続き、雨がまったく降らない自然災害を言う。『孟子』梁惠王章句下に「民ノ望<sub>レ</sub><sub>ト</sub>之<sub>ヲ</sub>若<sub>シ</sub>大<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>之<sub>望</sub>カ雲<sub>一</sub>霓<sub>一</sub>也」(天下の民が湯王に抱いていた気持ち)は) ちょうど大旱に俄か雨のきざしである雨雲や虹を待ちこがれるのと同じでし

た。) という用例がある(本文の引用は、天明六年(一七八六)刊『經典余師(孟子)』

(『經典余師集成(第二卷)』(大空社、二〇〇九年六月、七二頁)に拠り、日本語訳の引用は、岩波文庫『孟子(上)』(小林勝人訳注、一九六八年二月、九七頁)に拠る)。和刻本は「大」字を「太」に誤る。今、中国原本の表記に従う。左訓「オホヒデリ」(大日照り)。○太守 [tàishǒu] ≡ 府知事。行政府の最高長官。「知府」とも言う。左訓「ブ

キヤウ」(奉行)。○法官 [fǎguān] ≡ 職位のある道士(道教の修験者)。「法」は「法

の異体字。中国原本は「法」に作る。左訓「カヂシ」(加持師)。「加持師」は「加持祈禱を行う人」、ここでは「呪文を唱えて雨乞いをする人」の意。○祈雨 [qí yǔ] ≡

雨乞いをする。神仏に祈りを捧げ、雨が降ることを願う。「求雨 [qiú yǔ]」とも言う。左訓「アマゴヒ」(雨乞ひ)。○太守怒欲治之。≡ (雨が降らないので) 太守は怒って、

(雨乞いをした道士を) 処罰しようとした。和刻本は「欲」字を欠き、「太守怒<sub>テ</sub>治<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>」に作る。今、中国原本に従って「欲」字を追加し、私に訓点を施した。○小道 [xiǎodào]

≡ 道士(道教の修験者)の自称。わたくし。拙者。左訓「ワタクシ」(私)。○本事 [běnshì]

≡ 能力、技能、才能、腕。専門的な技術を言う。現代中国語と同じ。和刻本は、左訓「デ

キワ」を附すが、「テギワ」(手際)(歴史的仮名遣いは「テギハ」)である。濁点の位置

がずれたのであろう。○平常 [píngcháng] ≡ 普通である。一般並みである。左訓「ツ

ネナミ」(常並み)。○某裁縫 [mǒu cáiféng] ≡ 仕立屋の誰それさん。「某」は、特定の人名を伏せるときに用いる代名詞。「〇〇さん」の「〇〇」に相当する。○見得 [jiàndé]

≡ のように思われる。○要落幾尺。就是幾尺。≡ (仕立屋は、衣服を拵えるために布地の寸法を上手に測って切りそろえることができることから) 何尺の布地を切るう

と思えば、その長さぴったりに切り取ることができる、という意味(第八六話「有進益」に前出)。そして、さらにここでは、「落」という文字に「雨が降る」という意を利かせ、「雨

を降らせようと思えば、自由自在に好きなだけ降らせることができる」意を掛けている。

補注

この話は、『笑林評』(『笑林評卷之上』(内題)、第七四話)、『絶纓三笑』第一四一〇話「裁縫」、『笑府』卷五・広萃部(第二〇九話「裁縫」)に類話がある。なお、和刻本『笑府』に類話はない。『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』の原文は、それぞれ以下の通りである。『笑林広記』



び回ってばかりいる。そんなことをしていたら、最終的に碌な者にはならないぞ。」すると、三番目の婿は言った。

「大丈夫ですよ。いずれ私は、鉄槌かねてこを用意して、誰かの家の蔵をこじ開け、何千何万というお宝を易々と手に入れてみせますから。(そうなれば、上の二人のような)布地を何センチだとか、銀を何グラムだとか、そんなみみっちい儲けなど、物の数ではなくなりますから。」

お爺さんは言った。

「ということは、つまりお前は泥棒になるといふことか。」

婿は言った。

「いやあ、二人の兄さんたちだつて、まる一日、他人様の物を掠め取っているのですから、まさかそれを、泥棒でないなどと仰るわけではありませんまい。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部(二七丁表裏)。「新鐫笑林広記」巻之三・術業部(第一九三話、一丁裏一丁表)。「進益」[jinyi] (本来は、学問修養上の) 進歩。発展。転じて、「利益」「収入」という意味にもなる。ここでは、長女の婿が「布泥棒」になり、次女の婿が「銀泥棒」、そして三女の婿が「(ドアをこじ開けて人の家に押し入る) 大泥棒」になる、という具合に、次第に人の物をくすねる度合いがエスカレート(進歩)していることを言う。○裁縫「caifeng」= 仕立屋。左訓「シタテヤ」(仕立屋)。○銀匠「yinjiang」= 金銀細工師。貴金属を加工する職人。左訓「ギンサイク」(銀細工)。○手藝「shouyi」= 職人としての技術。技量。技。左訓「テシゴト」(手仕事)。「藝」は、常用漢字「芸」に書き換えられるのが一般的だが、「藝」[yi]と「芸」[yun]は、本来発音も意味も異なる別字であるため、「書き下し文」では、原本の表記を改めず、正字「藝」を使用した。○閒遊「xianyou」= ぶらぶらする。特別な目的もなく、自由気儘まかせままに遊ぶこと。「閒(閑)」は「ひま」の意。和刻本は「閒」に作る。「閒(閑)」[xian]と「間」[jian] [jiam]は、今も昔もしばしば混用されるが、本来は音も義も異なる。今、中国原本の表記に従い、「閒」に改めた。左訓「ブラック」。○要落幾尺。就是幾尺。= (仕立屋は、衣服を拵とぎえるために布地の寸法を上手に測って切りそろえることができることから) 何尺の布地を切ろうと思えば、その長さびったり切り取ることがで

きる。つまり、自由自在に生地きじの寸法を調節することができる、そのような職人としての技量を備えている、というのが本来の意味。ただし、後半に出てくるように、「落」[luo]は「(寸法通りに布地を) 切り取る」という意味の他に、「(他人のものを勝手に) 切り取る、自分のものにする」という意味にもなる。なお、「幾」[ji]は「桁ひしげたの数字を訊ねるときの疑問詞であり、この文は疑問詞を二度続けて用い、「それが幾つであるにせよ、その数量分だけ、自由にする」という意味を表す。現代中国語「几」[ji]と同じ。左訓「イク尺トリコモウトオモバイク尺トリコム」(幾尺取り込む)と思へば、幾尺取り込む)。○要落幾錢。就是幾錢。= (金銀細工の職人は、貴金属の飾り物を作るとき、原材料である銀を溶かし、その大きさも形も自由自在に作り替えることができることから) いくらの銀を切り取ろうと思えば、その大きさびったり銀を切り取ることができる。つまり、自由自在に銀の量や形を調節することができる、というのが本来の意味。ただし、これも仕立屋の場合と同様、「落」を「(他人のものを勝手に) 切り取る」意で解釈すれば、「(客から預かった銀を) 勝手に自分のものにしようと思えば、自由自在に盗み取ることができる」という意味にもなる。左訓「トリコマントスレハイクラノゼニ、ナル」(取り込まんとすれば、いくらの錢になる)。

○遊手好閒「youshou hao xian」= ぶらぶら遊んでばかりいて、まともに仕事をしない。和刻本『訳解笑林広記』は、「好」字の右上に、この文字の発音が去声(第四声)であることを示す圈点を附す。「好」字は、去声(第四声)のときは動詞「好む」、上声(第三声)のときは形容詞「よい」意となる(第八五話「好棋」参照)。また、和刻本は、「遊手」に左訓「ブラッキ」、「好閒」に同「アソビスキ」(遊び好き)を附す。なお、和刻本は、「閒」字を「間」字に作るが、今、中国原本の表記に従った。○有何結局二どのような結末が待っているだろうか。遊んでばかりいては、将来碌ろくな者にならないだろう、という意味。「結局」[jieju]は、「結末」「最終的に行き着くところ」の意。左訓「キマリガツカス」(決まりが着かぬ)。○不妨「bu fang」(そんなことは)構わぬ、差し支えない、心配いらない、大丈夫。『紅樓夢』第六回に「不妨。我教你老人家一個法子。」(大丈夫、俺が一つ手を教えてやるよ。)とある(日本語訳の引用は、『新訳 紅樓夢(第一冊)』(井波陵一訳、岩波書店、二〇一三年九月、一一八頁)に拠る)。左訓「カマハヌ」(構はぬ)。○鉄撥「tieqiao」= 金属製の梃子てこ。「撥」字は、中国原本は「撥」[qiao]に作り、和刻本は「概」[qie]に作る。中国原本の文字は、

補注

この話は、『笑府』巻七(第二九一話「棋」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』(岩波文庫、一九八三年一月、二五四頁)参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。

『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』と、ほぼ同文である。『笑林広記』「従来某高一着。縛手縛脚。」とある「従来」の二字が、『笑府』では「豈不聞」となっている点のみ、異なる。

唐本『笑府』第二九一話(明・泰昌元年(二六二〇)頃成立か、巻七・細娛部、筑波大学中央図書館蔵本、四丁裏)

棋

一人以好棋破産。因而為小偷。被人縛住。有相識者。見而問之。荅云。彼請我下棋。嗔我棋好。遂相困耳。客曰。豈有此理。荅云。豈不聞。棋高一着。縛手縛脚。

余説

本話は、囲碁道楽で破産した男が、盗みをはたらいた廉で逮捕され、挙げ句の果ては、「囲碁の腕が一枚上手だと(相手は)手も足も出ない(棋高一着。縛手縛脚。)」という成語を使って、「囲碁の腕が立つばかりに、このように縄で縛られてしまった」と、可笑しい言い訳をするという話である。

「笑いのツボ」は、「棋高一着。縛手縛脚。」という成語を、両義的に(ダジャレ、掛詞、地口として)用いているところにある。「縛手縛脚」という語に、囲碁における比喩表現「(相手が強すぎて)手も足も出ない」という意味と、まさしく文字通り「盗みをはたらいて捕まったので)縄で手足を縛られて動けない」という意味を掛けているのである。このダジャレは、外国語である日本語に翻訳しても、意味的にはそのまま通じなくもないだろうが、日本語にこのような成語がない以上、その可笑しさは、伝わりようがないと言うべきかもしれない。

ただし、泥棒の言葉には、成語本来の意味にそぐわない点があることについては、「現代語訳」末尾に附した【訳者注】に詳述した。今一度、味読してほしい。

⑧有進益 (ますますエスカレートする)

原文

有進益

一翁有三婿。長ハ裁縫。次ハ銀匠。惟第三者ハ不學ハ手藝。終日閑遊。翁責之曰ク。做裁縫的、要落幾尺。就是幾尺也。做銀匠的、要落幾尺。就是幾尺也。獨汝遊手好閑、有如何結局。三婿曰ク。不妨。待我打シテ一把鉄撥。々々開シテ人家庫門。要取論千論百。也是易事。稀罕。他幾尺幾錢。翁曰ク。這等說。竟是賊了。婿曰ク。他們兩個。整日落ス。人家東西。難道不然是賊。

書き下し文

進益あり

一翁三婿有り。長は裁縫。次は銀匠。惟第三者は手藝を学ばず。終日閑遊す。翁之を責めて曰く。裁縫と做る幾尺を落せんと要せば。就ち幾尺なり。銀匠と做る幾尺を落せんと要せば。就ち幾尺なり。獨り汝遊手好閑、何の結局有ん。三婿曰く。妨げず。我が一把の鉄撥を打して。人家の庫門を撥開して。論千論百を取んと要するを待て。也是易事なり。他の幾尺幾錢を稀罕とせん。翁曰く。這等に説けば。竟是賊なり。婿曰く。他們兩個は。整日人家の東西を落す。難道是賊ならざらん。

現代語訳

あるお爺さんには、三人の娘婿がいた。一番上の婿は仕立屋、二番目の婿は銀細工の職人であったが、三番目の婿だけが、手に職を持っておらず、一日中ぶらぶら遊んでばかりいた。お爺さんは、これを叱りつけて言った。

「仕立屋は、(衣服を拵えるとき)布地を何尺か切り取ろうと思えば、思い通りの寸法に布地を切り取ることができる。銀細工の職人は、(銀細工を拵えるとき)何グラムかの銀を切り取ろうと思えば、思い通りの量だけ銀を切り取ることができる。(それだけの専門的な技術を身に付けているのである。)ところが、お前だけは、(将来自分の身を助けるであろう、何らかの技術を身に付けようともせず)ただぶらぶらと遊

なれば。縛手縛脚す。

現代語訳

ある男、囲碁が大好きすぎて身代を潰したため、コソ泥になり、ついにはお縄を頂戴すること相成った。この男の知り合いが、(縄で縛られている) 男の姿を見て(これは一体、どうしたわけだと) 訊ねたところ、男は答えた。

「あいつがわしと一局(囲碁の) 勝負したいと言ってきたので、行って勝負してやったら、わしの方が強かったので、それに奴は腹を立て、ついにはわしをこんな目に遭わせよつたというわけじゃ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか。」と言うと、男は答えた。

「昔から、『囲碁の腕が一枚上手だと、(相手方は身動きが取れず) 手も足も出ない(棋高一着。縛手縛脚。』と言うじゃろが。つまり、わしのように囲碁が強いと、このように、手も足も、縄で縛られてしまうということじゃ。」

【訳者注】最後に言及されている成語「棋高一着。縛手縛脚。」は、本来「囲碁の腕が一枚上手だと、(相手は) 手も足も縄で縛られた状態になる」という意味。ところが、この男は、自分の方が囲碁の腕前が一枚上手であったばかりに、このように縄で手足を縛られる羽目に陥った、と言っているのである。冒頭の一文から察するに、男は人の家に押し入って盗みを働いたために捕縛されたのであり、そしてさらに、偶然知り合いに縄で縛り上げられた現場を見られてしまったために、とっさに成語を使った洒落た言い回しで、その場凌ぎの負け惜しみを口走った、というのが、この話の筋である。しかしながら、この泥棒の言い分には、次のような勘違いが含まれている。「棋高一着。縛手縛脚。」という成語において、「縛手縛脚」は「手を縛られた状態」になっているのは、もちろん囲碁の腕前が一枚上手の人ではなく、その相手、つまり囲碁が弱くて「手も足も出ない」方の人である。したがって、いま自分が手足を縛られ、「手も足も出ない」状態になっているのであれば、それは取りも直さず、この男こそ、囲碁の腕前においても格段に劣っていたという事実が、実は示されていることになる。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二七丁表)。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部(第一九〇話、一二丁表)。○好碁 [hào qí] 囲碁や将棋を好む。博奕や賭博などの賭け事を好む、という意味にもなる。近代以前の中国には、「囲碁」象棋(中国将棋)の他にも、「塞戯」「格五」「彈棋」「双陸」「樗蒲」「五木」と呼ばれるボードゲームが存在したと言われるが(『大般涅槃經』)、ここは「囲碁」または「象棋」を指す。「碁」は「棋」の正字。和刻本は、標題「好碁」、本文「好碁」に作る。「碁」[qí]、「碁」[qí]は「棋」の正字。和刻本は、標題「好碁」、本文「好碁」に作る。「碁」[qí]と「碁(棋)」を區別して用いるため、ここでは中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年(一七六一) 宝仁堂刊本)の表記に従って改めた。なお、和刻本は「好」の右上に声点符号を附し、「好」が去声(第四声 [hào])、「このむ」意の動詞であることを明示している。「好」字は、形容詞「よい」という意味のときは上声(第三声 [hǎo])で読む。○小儉 [xiǎo jiàn] こそ泥。泥棒。盗人。現代中国語と同じ。○被人縛住 [bèi rén fù zhù] 人に縄で縛られる。「住 [zhù]」は、動詞の後に置かれ、その動作が「ここにしっかりと、とどまる」意を表す結果補語。現代中国語と同じ。和刻本は「縛住」に左訓「シバルル」(縛らる)を附す。○相識者 [xiāng shí zhě] 知り合い。左訓「ナジミ」(馴染み)。○見而問之。答曰。 和刻本は「曰」を「云」に作る。今、中国原本に拠り、改めた。○下碁 [xià qí] 囲碁をさす、将棋をする。現代中国語と同じ。○困 [kùn] 苦しめる、困らせる。○豈有此理 [qǐ yǒu cǐ lǐ] そんな道理があるうか。そんな馬鹿な話はない。とんでもない。もつてのほかだ。言語道断である。現代中国語でもよく用いられる常套語。○其人答曰 和刻本は「曰」を「云」に作る。中国原本に拠り、改めた。○碁高一着。縛手縛脚。 [qí gāo yī zhuó, fù shǒu fù jiǎo] 囲碁・将棋の手腕が一枚上手だと、(相手は)手も足も出ない(成語)。明末の中国白話小説『二刻拍案驚奇』第二卷に「正所謂棋高一着。縛手縛脚。況兼是心意不安的。把平日的力量一發減了。連敗了兩局。」(まさしく「囲碁の手腕が一枚上手だと、相手は手も足も出ない」といったところです。それに加えて(女棋士の妙観さんは)心が乱れに乱れておりましたから、いつもの力さえ發揮することができず、二局続けて負けてしまいました)。(拙訳)とある。左訓「ヒトテツヨケレバ ドコモカモシバラレルモノダ」(一手強ければ、どこもかも縛られるものだ)。

う、どこが最もよく似ていると思いますか。」  
この人は、ずいぶん長い間、迷いに迷ってから、こう言った。  
「ひげが、最もよく似ています。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部(二六丁裏)二七丁表。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部(第一八八話、一〇丁裏)一一丁表。○鬚鬚[húxū]＝ひげ。「鬚」は「口ひげ」、「鬚」は「あごひげ」。○像[xiàng]＝似ている。現代中国語と同じ。○途人[túren]＝通行人、通りすがりの人。比喩的に「見知らぬ人」を意味する場合もある。○肖[xiào]＝「像」(似ている)。ちなみに、「不肖の子(悪い子)」という語は、親に「似ていない(不肖)」という意味に基づく。○那一處最像[nā yīchù zuì xiàng]＝どの部分が最もよく似ていますか。「那」は、現代中国語「哪[nǎ]」(どの)に相当する。明清時代の中国語文献では、「那[nà]」(その、あの)と「哪[nǎ]」(どの)は、どちらも「那」と表記された。「處」は「処」の本字。左訓「ドコノトコロガ ヨクニテラル」(どこの所が、よく似てをる)。○方巾[fāngjīn]＝四角い帽子。明清時代の中国では、教養のある「秀才」「諸生」「廩生」「生員」たちは、「方巾[fāngjīn]」と呼ばれる四角い帽子をかぶっていた。第一一話「無一物」を参照。左訓「カクツキン」(角頭巾)。「角頭巾」は、「すみ頭巾」とも「つの頭巾」とも言い、江戸時代初め頃から、老人・医者・僧などが使用していたものであり、後ろに鉤のような垂れが付いている。中国の「方巾」に似ているが、少しデザインが異なる。○囑咐[zhūfù]＝「囑咐[zhūfù]」(言い聞かせる、言いつける、命ずる)。○都[dōu]＝すべて、みな、全部。現代中国語と同じ。和刻本は「ミナ」と訓ませている。○有人說過[yǒu rén shuō guo]＝直訳は「誰か言ったことがある」。動詞の後に置かれるアスペクト助詞「過[guo]」は、過去の経験(したことがある)意を表す。○不勞再講[bù láo zài jiǎng]＝もう(その、こと)を言う必要はない、もう言うには及ばない。「講[jiǎng]」は、中国南方でよく用いられる動詞であり、普通話(中国の標準語)「説[shuō]」(言う、話す)と同意。左訓「オツシヤルニハ及ヌ」(仰るには及ばぬ)。○形體[xíngtǐ]＝ここでは、「(人間)の身体」の意。「體」は「體」の俗字。なお、常用漢字「体」は「體」の俗字である。また、『訳解笑林広記』巻上・三二丁表から始まる「形体部」の「形体」も、この意味で用

いられている。○躊躇半响[chóuchú bànshǎng]＝しばらくの間、どこが似ているか、なかなか思い付かず(ためらって)。「半响」は「しばらく」の意。第六八話「做制字」にも見える。○鬚鬚最像[húxū zuì xiàng]＝ひげが最もよく似ている。左訓「ヒケガヨクニテラル」(ひげがよく似てをる)。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纒三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

この話も、前話に引き続き、絵の下手な肖像画家をからかった話である。この人の描いた人物画は、帽子と衣服と、それから無理に似ているところを挙げれば、ヒゲくらないものか、というもの。言うまでもなく、肖像画で最も重要なのは、目と鼻と口(顔)であろう。

第八三話「写真」と同様、肖像画家という職業人としてはあるまじき、似顔絵を描くのが下手な似顔絵師を嗤った話、ということである。

◎好棋(囲碁が大好き)

原文

好碁

一人以ニ好碁ヲ破ルヲ産。因テ而為ニ小儔。被ニ人ニ縛一住、有ニ相識者。見テ而問レフヲ。答テ云ク。彼請レ我下レ碁。嗔ニ我碁好一。遂ニ相一困耳。客曰ク。豈ニ有ニ此理一。其ノ人答テ曰ク。從來碁ノ高キ一着。縛一手縛一脚。ト云モカモソバハラレルモノク。

書き下し文

碁を好む

一人 碁を好み産を破るを以て。因て小儔と為る。人に縛住せらる、相識者有り。見て之を問ふ。答て云く。彼我を請て碁を下す。我が碁の好きを嗔り。遂に相困するのみ。客曰く。豈此の理有んや。其の人答て曰く。從來碁の高き一着

者を挿擧する話ではなく、「絵の下手な画家をからかった話」なのではないか、という気がしてくることであろう。

「紙代と墨代と謝礼を入れて、合計四万二千円（銀三分）しか支払わなかった」と描かれていることから、依頼者のケチ臭さを挿擧する気持ちは、完全には消えないであろうが、『笑府』所収話の前後の話は、第三二〇話「テール（卓）」がケチな大工を挿擧する話、第三二二話「質屋をひらく（開典）」がずる賢くケチな質屋をからかう話となっておりことから、『笑府』編者の意図としては、第三二一話「肖像画（行楽図）」も、肖像画家という職人にあるまじき可笑しなことをする（肖像画家なのに顔を描かずに、後ろ姿だけを描こうとする）「ケチ臭い、いかさま職人」をからかったものであろうと思われる。

余説

「術業部」に入ってから、医者や薬の話が続いていたが、ここからは、専門的な職業職人についての話が始まる。

本話は、売れない「肖像画家」、商売あがったりの「似顔絵師」を冷やかしたものの。「肖像画」が売れないので、自分たち夫婦の「肖像画」を描いて見たところ、いつも自分たちの顔を見ているはずの妻のお父さんですら、それが自分の娘であるということに気が付かず、さらには、娘がなぜ「見知らぬ男（面生人）」と一緒に座っているのかと聞き返されてしまった、という話である。その絵の状況から判断して、娘の隣に描かれているのは、その夫以外にあり得ないのに、ということである。

これほどまでに絵の下手な「肖像画家」ならば、商売繁盛するはずがない。この話は、ピアノの下手なピアニスト、話の下手な漫才師、手先の不器用なマジシャン、といった類の、手に職を持つ職業人にあるまじき人間たちをからかった話と言えるであろう。

⑧4 鬚鬚像 (ひげが似ている)

原文

鬚鬚像

一画士寫真既就。謂主人曰。請執途人而問之。試看肖像否。主人

從レフ之ニ。初見一人。問曰。那ノ一處カ最モ像ケル。其人曰。方巾最モ像。次ニ見一人。又問曰。那ノ一處最像。其人曰。衣服最像。及見第三人。画士囑レテ之曰。方巾衣服都ナ有レ人説キ過。不勞再講。只、問フ形體何如。其人躊躇半响曰。鬚鬚最像。

書き下し文

鬚鬚像り

一画士写真既に就る。主人に謂て曰く。請ふ途人を執て之を問へ。試みに看よ肖たるや否や。主人之に従ふ。初め一人を見る。問ふて曰く。那の一处か最も像る。其の人曰く。方巾最も像り。次に一人を見る。又問ふて曰く。那の一处か最も像る。其の人曰く。衣服最も像り。第三人を見るに及で。画士之に囑して曰く。方巾衣服都人有りて説き過す。再び講を勞せず。只問ふ形體は何如。其の人躊躇半响して曰く。鬚鬚最も像り。

現代語訳

ある画家が、肖像画を描き上げ、依頼主に言った。

「道行く人をつかまえて、試しに（実物のあなたと肖像画とが）似ているかどうか、訊ねてみてくださいいな。」

依頼主は、言われた通りにした。まず最初に通りかかった人に、こう訊ねた。

「（私の実物の姿と、この肖像画の）どの部分が最もよく似ていますか。」

すると、その人はこう答えた。

「四角い帽子が、最もよく似ています。」

それからまた、次に通りかかった人に、こう訊ねた。

「どの部分が最もよく似ていますか。」

今度の人は、こう答えた。

「服の感じが、最もよく似ています。」

すると画家は、三番目に通りかかった人に、次のように言い付けた。

「四角い帽子と、衣服については、どちらも似ていると言った人がいるので、もう言う必要はありません。（肖像画に描かれている）この人の身体の部分では、どうでしょ

ある日、舅しゅうが様子を窺うかがいにやって来た。舅しゅうは、次のように訊たずねた。

「この女性は、誰たれじゃ。」

「あなたのお嬢ぢやうさまです。」

舅しゅうは、また訊たずねた。

「わしの娘が、どうしてこんな見知らぬ男と、一緒に座まっておるのじゃ。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二六丁裏)。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部(第一八七話、一〇丁裏)。○寫真 [xiè zhēn] ≡ 肖像画を描く。または、肖像画を描く画家のこと。「寫」は「写」の本字。左訓「エザウカキ」(絵像描き)。○絶無 [jié wú] ≡ 全くない。「絶」は、否定詞の前に置かれ、否定の程度を強める副詞。「全く」「決して」「絶対に」の意。○生意 [shēng yì] ≡ 商売、取引、ビジネス。現代中国語と同じ。左訓「シャウバイ」(商売)。○行樂 [xíng lè] ≡ 「行楽図 [xíng lè tú]」(肖像画、自画像)。『笑府』第三二話(卷八「刺俗部」)に「行楽図(肖像画)」という話がある。『儒林外史』第二八回に「因返舎走走。在這裡路過。聞知大名。特來進謁。有一個小照行樂。求大筆一題。」(今度帰郷の途次、こちらを通りかかって、ご高名をうけたまわり、特にお目どおりをお願いしました。というのは、私、小さな肖像画を持っております、これに一筆いただけないものかと思つたのでございます。)とある(日本語訳の引用は、中国古典文学大系43『儒林外史』(稲田孝訳、平凡社、一九六八年一〇月、二五三頁)に拠る)。左訓「イキエザウ」(生き絵像)。なお、和刻本は「行樂」で句読くくを切るが、不自然であるため、中国原本の句読くくに従って書き下した。○丈人 [zhàng rén] ≡ 「岳父 [yuè fù]」(妻さいの父、舅しゅう)。左訓「シウト」(舅)。○望 [wàng] ≡ 「探望 [bàiwàng]」「探望 [tàn wàng]」「看望 [kàn wàng]」と同意。「訪問する」「伺う」「見舞う」意の動詞。左訓「ミマフ」(見舞ふ)。○令愛 [lìng ài] ≡ お嬢様、御令嬢。相手の娘に対する敬称。左訓「オムスメ」(お娘)。○為甚 [wéi shén] ≡ 「為甚麼 [wéi shénme]」と同じ。「なぜ」「どうして」という意味の疑問詞。左訓「ナゼ」(何故)。○面生人 [miànshēng rén] ≡ 面識のない人。知らない人。現代中国語と同じ。左訓「シラヌヒトビト」(知らぬ人々)。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に全く同じ話はないが、『笑府』第三二話「行楽図」(卷八「刺俗部」)に、肖像画家に関する次のような話がある。松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一五頁)に示された日本語訳も掲載しておく。なお、岩波文庫本に「第三二〇話」とあるのは「第三二一話」の誤りである。

唐本『笑府』第三二一話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、卷八・刺俗部、筑波大学中央図書館蔵本、五丁表裏)

行楽圖

一人要寫行樂圖。連紙墨謝儀。共只三分。画者乃用水墨于荊川紙上。画一背像。其人曰。寫真全在容顏。如何背了。画者曰。我勸你莫把面孔見人罷。

肖像画(行楽図)

ある人、肖像画をかいってもらうのに、紙と墨の代に謝礼までこみで、たったの銀三分出した。さて絵かきが描いて来た絵を見ると、荊川紙に水墨で後向きの像がかいてあった。そこで、

「肖像画というのは顔がかんじんだ。どうして後向きになつてるんだ」というと、

「わたしはね、あなたはお顔を人に見せないようになすつた方がいいと申し上げたんですよ」

注 あまりにも面子めんしのないやり方を嘲あざわった。荊川紙はサラ紙の一種。

松枝氏の翻訳を読むと、『笑府』所収の「肖像画(行楽図)」という話は、肖像画を描いてもらうのに、たった銀三分(約四万二千円)しか支払わなかったケチ臭い依頼者を風刺する話として紹介されているように見えるが、『笑林広記』「肖像画(写真)」を読んだ人には、『笑府』に登場する肖像画家も、自分の未熟な腕前を隠すために、わざと依頼者の顔を描かなかつたのではないか、つまりこの話は、ケチ臭い依頼

白薬。白色粉末の漢方薬。止血効果があると云う。ただし、「白」には「無料の」「ただの」という意味もあり、ここではそれら二つの意味を掛けている。左訓「タ、ノミ」(ただ飲み)。

補注

この話は、『絶櫻三笑』巻三時笑・影語五七(第四一九話「不謝医」)に類話がある。和刻本『笑府』に類話はない。

『絶櫻三笑』収録話の原文は、以下の通りである。会話文の内容は同じだが、『絶櫻三笑』では、冒頭部分の状況説明が省略されており、笑話として、やや不完全な印象を受ける。編集上の不備であろうか。『絶櫻三笑』には、拙訳を附す。

唐本『絶櫻三笑』第四一九話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻三、時笑・

影語五七、東京大学文学部蔵本、二六丁裏〜二七丁表)

不謝醫

問醫者。猫生病吃甚薬。曰。吃鳥薬。又問假如狗

生病。如何。曰。吃白薬。

調得自然

医者に謝礼せず

「ネコが病気になったら、どんな薬を飲ませますか。」と医者に質問すると、医者は、「鳥薬(黒い薬)を飲ませればよいじゃろう。」と言った。そこでさらに、「もしイヌが病気になった場合は、どうですか。」と訊ねると、「白薬(白い薬)を飲ませればよいじゃろう(イヌみたいな奴は、医者に謝礼も支払わずに、タダで薬を飲むじゃろう)」と答えた。

(編者のコメント) 薬の調合は適切である。

余説

この話の笑いのツボは、最後の一言「吃白薬 [chī bái yào]」という言葉のもつ両義性(ダジャレ)にある。「イヌは白薬(白い薬)を飲む」「イヌのような奴は、た

だで薬を飲む」「ただで薬を飲んでいるお前はイヌだ」と言うことによって、いつも治療費を支払わない患者たちに対して、日頃の鬱憤を打ちまけたというわけである。

中国語で「狗」というのは、人間以下の脳味噌しか持たないバカモノをけなす表現であったことについては、前話の注でも説明したが、『訳解笑林広記』「腐流部」(拙稿『訳解笑林広記』全注釈(一)「同(二)」同(三)」所収)にも、多数の例話があるときは、くれぐれもその使い方に注意してほしい。

⑧写真(肖像画)

原文

寫真

有<sub>二</sub>寫<sub>一</sub>真<sub>者</sub>。絶<sub>ニ</sub>無<sub>シ</sub>生意<sub>一</sub>。或<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>勸<sub>ム</sub>他<sub>ヲ</sub>將<sub>テ</sub>自<sub>己</sub>夫妻<sub>ヲ</sub>。画<sub>シ</sub>テ一<sub>幅</sub>行<sub>樂</sub>。貼<sub>出</sub>セハ。人<sub>見</sub>方<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>。画<sub>一</sub>者<sub>乃</sub>依<sub>レ</sub>計<sub>ニ</sub>而<sub>行</sub>。一日<sub>丈</sub>人<sub>来</sub>望<sub>ム</sub>。因<sub>テ</sub>問<sub>フ</sub>此<sub>ノ</sub>女<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>誰<sub>ナリ</sub>。答<sub>テ</sub>云<sub>フ</sub>。就<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>愛<sub>ム</sub>。又<sub>タ</sub>問<sub>フ</sub>他<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>甚<sub>ヲ</sub>與<sub>ニ</sub>這<sub>ノ</sub>面<sub>生</sub>人<sub>一</sub>同<sub>坐</sub>ス。

書き下し文

写真

写真する者有り。絶して生意無し。或ひと他に勧む自己夫妻を將て。一幅の行楽を画して貼出せば。人見て方に知らん。画者乃ち計に依て行ふ。一日丈人来り望む、因て問ふ此の女は是誰ぞ。答て云く。就ち是令愛。又問ふ他甚を為してこの面生の人と同坐す。

現代語訳

まったく売れない肖像画家がいたので、ある男が、次のように助言した。

「自分たち夫婦の肖像画を描いて貼り出してあげば、それを見た人が(あなたの腕前に)感心するのではないか(そして、もっと商売が繁盛するようになるのではないか)。」

と。そこで、画家は言われた通りにした。

ことであり、また、小児科医の方は、患者を大人まで生き長らえさせることができないと言っただけから、やはり治療に失敗し、幼気な患者たちの命を奪っているということである。

一言で言えば、成人内科医であれ、小児科医であれ、いずれにせよ、医者というのは、結局ただの人殺しである、ということであろう。

「術業部」の話は、これまでのところ、すべて医者を非難し、揶揄しようとするものばかりである。

⑧ 吃白薬 (ただで薬を飲むのは、イヌみたいな奴である)

原文

吃白薬

有終日吃薬而不謝醫者。醫甚憾之。一日此人問醫曰。猫生病。吃甚薬。曰。吃鳥薬、然則狗生病。吃何薬。曰。吃白薬。

書き下し文

白薬を吃す

終日薬を吃して医に謝せざる者有り。医甚だ之を憾す。一日此の人医に問て曰く。猫病を生ず甚の薬を吃す。曰く。鳥薬を吃す、然らば則ち狗病を生ぜば何の薬を吃す。曰く。白薬を吃す。

現代語訳

長い間、薬を飲んでいくせに、医者に謝礼を支払わない人がいた。医者は、それをたいそう恨みに思っていた。ある日のこと、この男は、医者にこんな質問をした。

「ネコが病気になるったら、どんな薬を飲ませますか。」  
「医者は言った。」

「鳥薬を飲ませます (訳者注: 「黒い薬を飲ませる」という意味にもなる)。」  
「それでは、イヌが病気になるったら、どんな薬を飲ませますか。」

「白薬を飲ませます。」

【訳者注】この医者は、ネコなら「鳥薬」黒い薬を飲ませればよいので、イヌなら「白薬」白い薬だろ、いかにも藪医者らしく、いい加減な診断を下したのであるが、「吃白薬 (白薬を飲む)」という言葉は、「治療費を支払わずに無料で薬を飲む」という意味にもなることから、「イヌは無料で薬を飲む」も「いつも無料で薬を飲むような奴は、イヌである」と言ったことになる。この医者が、意図的に「薬を無料で飲んでお前のような奴はイヌである。」と言ったのだとすれば、この医者はなかなか隅に置けない皮肉屋である。なお、中国語で人に向かって「狗」と言った場合、それは、貴様はまともな人間とは異なる、今一歩知恵の足りない脳味噌の持ち主(馬鹿)である、という意味の罵詈にもなる。第三二話「是我」の注(『訳解笑林広記』全注釈(三))『東アジアの古典文学における笑話』新葉館出版、二〇一七年一〇月、一六九〜一七四頁)を参照。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部(二六丁表裏)。「新鐫笑林広記」卷之三・術業部(第一七七話、八丁表)。「吃白薬」[chī bái yào] = 「白薬」という白色粉末の漢方薬を飲む」という意味と、「(お金を払わずに)ただで薬を飲む」という二重の意味をもつ。現代中国語と同じ。本文末尾「吃白薬」には、「白」字に右傍訓「シロ」、左訓「タ、ノミ」(ただ飲み)を附す。「白薬」については後述する。○終日 [zhōng rì] = 通常は「一日中」「終日」という意味で用いられるが、ここでは「長い間」「しばらくの間」の意。左訓「ネンヂウ」(年中)。○不謝醫 [bù xiè yī] = (医者の診察を受け、薬を服用しているのに) 医者に謝礼を支払わない。医者に治療費(および薬の代金)を出さない。「醫」は「醫」の異体字。「醫」は「医」の本字。○吃甚薬 [chī shèn yào] = どういう薬を飲みますか。「甚 [shèn]」は、現代中国語「什么 [shénme]」(なに)に相当する疑問詞。和刻本は「甚」に右傍訓「ナニ」(何の)を附す。○鳥薬 [wū yào] = ウヤク(植物名)。クスノキ科の常緑低木。漢方薬として用いられる。健胃、整腸、鎮痛などの薬効があると言う。中国語で発音した場合、「鳥薬 [wū yào]」は「黒い薬」という意味にも聞こえる。この文章は、ネコが病気のときは「黒い薬(鳥薬)」を飲み、イヌが病気のときは「白い薬(白薬)」を飲む、と続いている。○白薬 [bái yào] = 雲南

われ大人を医<sup>い</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>、俱<sup>とも</sup>に<sup>へん</sup>変<sup>が</sup>じて<sup>な</sup>孩<sup>がい</sup>子<sup>し</sup>と成<sup>な</sup>して<sup>あ</sup>他<sup>た</sup>に<sup>あ</sup>与<sup>あ</sup>へて<sup>い</sup>医<sup>い</sup>せしむ。誰<sup>たれ</sup>か<sup>おも</sup>想<sup>かん</sup>ん<sup>が</sup>他<sup>た</sup>孩<sup>がい</sup>子<sup>し</sup>を<sup>い</sup>医<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>。一<sup>いっ</sup>個<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>也<sup>だ</sup>大<sup>だい</sup>に<sup>き</sup>来<sup>ら</sup>て<sup>あ</sup>我<sup>われ</sup>に<sup>あ</sup>与<sup>あ</sup>へて<sup>い</sup>医<sup>い</sup>せしめ<sup>ざ</sup>らんと<sup>は</sup>。

### 現代語訳

成人の患者を専門に診る内科医が、小児科の医者を踏み付け、激しく殴っていたので、周りの人は、宥<sup>なだ</sup>めて言った。

「あなたたちは、二人とも同業者ではありませんか。何もそんなに殴らなくてもいいではありませんか。」

成人内科医は言った。

「皆さん方は、あまり御存知ないのでしようが、こん畜生は、とんでもない奴なんじゃ。わしが診察した大人の患者は、みんな子どもに生まれ変わらせ、小児科のこいつに（新たな患者として）供給してやっているといるのに、あるうことか、こいつが診察した子どもの患者は、誰一人、大人の患者として（成人内科医の方に）還元してくれないのじゃから。」

### 注

○『訳解笑林広記』卷之上・術業部（二六丁表）。『新鐫笑林広記』卷之三・術業部（第一一七話、七丁表）。○大方 [dāfāng] = 大方脈 [dāfāngmài]（大人専門の内科医）のこと。○幼科 [yòukē] = 小兒科 [xiǎo'érkē]（小児科）と同じ。「小方脈 [xiǎofāngmài]」とも言<sup>い</sup>う。○大方脈 [dāfāngmài] = 大人専門の内科。「脈」は「脈」の俗字。左訓「オトナイシヤ」（大人医者）。○採住 [cǎi zhù] = 「採住 [cǎi zhù]」の音通。踏み付ける意。「採」は「足の裏で踏み付ける」意の動詞。「住」は、動詞の後置かれる結果補語で、その動作が「しっかりと定着する」意を添える。左訓「トラマエテ」（捕まえて）。和刻本は「採」字の音通ではなく、「採」の字義を取っているが、中国文献にそのような使用例を見ない。○小兒科 [xiǎo'érkē] = 小兒科。「幼科」も言う。「兒」は「兒」の本字。左訓「コトモイシヤ」（子供医者）。○同道 [tóngdào] = 同業者。『二刻拍案驚奇』卷二に「你兩家同道中又是對手。正好做一對兒夫妻。」（あなた方は両家ともに同業者（棋士）でもあり、いいお相手（ライバル）でもありますから、まさしく一組の夫婦となるのがちょうどよいのです。（拙訳）とある。左訓「オ

ナジシヤウバイ」（同じ商売）。○列位 [lièwèi] = 皆さん、諸君、各々方。左訓「オノオノガタ」（各々方）。○這厮 [zhè sī] = こいつ。男性に対する軽蔑の気持ちを込めた呼称。左訓「キヤツ」（彼奴）。○可惡得緊 [kě'è de jǐn] = 極めて憎たらしい。憎たらしいつたらない。「可惡」は「憎たらしい」意の形容詞。『儒林外史』第四三回に「那大石崖。金狗洞一帶的苗子。尤其可惡。」（なかでも憎むべきは大石崖・金狗洞一帶の苗族で）とある（日本語訳の引用は、中国古典文学大系43『儒林外史』（稲田孝訳、平凡社、一九六八年一〇月、三八二頁）に拠る）。「得」は「得」の異体字。「形容詞 + 「得」 + 程度補語（副詞的表現）」の形をとり、「憎たらしさ」の程度がどれほどかを示す表現。「緊」は、「非常に」「たいへん」という意の副詞（南方方言）。明清白話小説によく用いられる。現代中国語「很 [hěn]」に相当する。和刻本は、「可」に右傍訓「ハナハダ」（甚だ）、「惡得緊」に左訓「ヒドクワルクヤツ」（ひどく悪き奴）を附しており、「可惡」が二字で一語の形容詞（憎たらしい）であることを見落としている。○我醫的<sup>わが</sup>大人<sup>だじん</sup> = 私が治療した大人（の患者）。和刻本は「我大人を醫<sup>い</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>」と読み下しているが、「的」を「えて（得て）」と訓むと、日本語としては「治すことができて」という意味が生じてしまい、微妙に意味がずれる。「我醫<sup>わが</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>大人<sup>だじん</sup>（我が医する大人）」「我醫<sup>わが</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>大人<sup>だじん</sup>（我が医する大人）」と訓<sup>よ</sup>んだほうが、まだ中国語原文の意味に近い。○孩子 [hái zǐ] = 子ども。現代中国語と同じ。左訓「コドモ」（子供）。○他醫<sup>た</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>孩子<sup>がいし</sup> = 彼が治療した子ども（の患者）。和刻本は「他<sup>た</sup>孩子<sup>がいし</sup>を<sup>い</sup>的<sup>てき</sup>的<sup>てき</sup>」と読み下しているが、やはり前の例と同様に、そのように訓<sup>よ</sup>んだ場合、中国語原文の意味からは微妙にずれる。

### 補注

この話は、原本『笑林評』『絶<sup>ぜつ</sup>纓<sup>えい</sup>三<sup>さん</sup>笑<sup>しょう</sup>』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

### 余説

成人内科医は患者を小児科医の患者として供給しているのに、小児科医は患者を成人内科医に提供しないというのは怪しからん、だから殴り付けているのだ、という話つまり、大人の患者を診察する医者は、患者を死なせてあの世に送り、子どもに生まれ変わらせているのだから、実はただ患者の治療に失敗し、命を奪っているという

みを働いていた。衣服を天日干してんぴにしている人がいたら……」と、すべて同じ形式(口調)で語るのである。和刻本の訓は、この特徴的な構造をもった意図的な口調に気づいていないようである。「書き下し文」は、すべて修正しておいた。○延壽一紀「[yànshòu yǎn]」= 寿命を十二年延ばしてやろう。「壽」は「寿」の本字。「一紀」は「十二年」の意。後に「一世(人が生まれてから死ぬまでの時間)」、さらにはもつと長い時間を指すようになった。○做賊「[zuò zéi]」= 盗みを働く、泥棒をする。和刻本は「賊と做り」と読ませているが、この読みは、前に登場した医者と遊女のセリフの形式に対応しておらず、適切ではない。「做賊ぞく(賊を做す)」と訓むべきである。○人家「[rénjiā]」= 人だれか。この場合、「家」は接尾辞であり、「家」という具体的な意味はない。○晒晾「[shàiliàng]」= (洗濯物を) 天日に干す。「晾」は、中国原本は「晾」[liàng]に作るが、通常のコンピュータでは入力できない文字であるため、今、意味も発音も同じ文字「晾」[liàng]で代用した。和刻本は、形は似ているが、全く意味の異なる「眼」[yǎn]に誤る。左訓「ヒケラカス」も誤り。「ヒニサラス」(日に晒す)とでも訓ずべきところ。和刻本の施訓を適宜修正して「書き下し文」を作成した。○散放「[sǎnfàng]」= (金銭や物資を) 放出する。支給する。ばらまく。左訓「マキチラス」= 撒き散らす。○分勞代力「[fēn láo dài lì]」= (苦しんでいる人と) 苦勞を分かち合い、(貧しい人たちの) 代わりに力を尽くす。ここでは、洗濯物を代わりに取り込んでやり(= 服を盗む)、金を撒き散らすの手伝う(= 金を盗む)、という意味。「勞」は「勞」の本字。○發轉陽世「[fāzhuan yangshi]」= 現世に生まれ変わらせる。○急忙「[jí máng]」= 急いで、慌ただしく。現代中国語と同じ。左訓「アハテ、」(慌てて)。○判断「[pànduan]」= 判断する、裁きを下す。左訓「オサバキ」(お裁き)。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

この世では、先生先生と呼ばれ、社会的地位も高そうに見える医者だが、あの世で閻魔大王の裁きを受けければ、医者は大王が死なせようとした罪人を生き返らせた科かにより油地獄あぶらじごくの刑に処され、遊女は独り身の男性に便宜を図った善行により十二年の

延命を申し付けられ、泥棒は衣類や金銀の片付けを手伝った善行により十年の延命および現世への転生を言い渡された、という話。そして、話のオチは、それならば、医者は子どもたちに自分の家業を継がせるのではなく、息子は泥棒、娘は遊女にした方がよい、と医者に言わせているところにある。

中国笑話集『笑林広記』の中に、医者を好意的に扱った話は皆無であると言っている。医者は十中八九、見立て違い(診療ミス)によって患者を殺す數医者である。この話の前半部分は、そういう意味で、珍しく「起死回生」(死者を生き返らせる)という、神がかり的な医術を修得した(と自称する)医者が登場するのだが、その優れた医者は、なんと殺すべき罪人を生き返らせてしまった罪に問われ、閻魔大王えんまに処罰されるのである。

中国笑話における医者とは、現世では、死なせるべきではない患者をむやみに死なせてしまう「人でなし」であり、閻魔の庁では、死なせるべきであった罪人をむやみに生き返らせてしまう「罰当たり者(地獄における犯罪者)」として描かれる、ということであろう。明清時代の中国において、医者というものに対する恨みが極めて根強かったことを窺わせるに十分である。

⑧ 大方打幼科 (成人内科医が小児科医を殴る)  
原文

大方打二幼科一  
大一方一脈 採二住小兒科一 痛打ス。傍人勸メテ曰ク。你 兩一個 同道 中ニ、何ソ苦シク  
如レテ此。大一方一脈 曰ク。列位 有所不知。這一廝 可惡得緊、我レ醫二一的  
大一人一、俱ニ變ニ成ニテ 孩子一ト 與レ他 醫ニシテ。誰 想 他 醫ニ 的 孩子一ト。一一個モ也 不レ放メ  
大ニ來テ 與レ我ニ 醫セ。

書き下し文

大方 幼科を打つ  
大方脈 小兒科を採住し 痛打す。傍人 勸めて曰く。你 兩個 同道中なるに、何ぞ  
苦んで 此の如くなる。大方脈 曰く。列位 知らざる所 有り。這廝 可惡得緊、

「わしはいつも鬼卒を遣わして罪人を召し捕っておったが、お前はそのわしに盾突いて、罪人の命を助けておったというわけか。こいつは油の煮えたぎった鍋に放り込んでしまえ。罪の報いを受けるがよい。」

次に、遊女にも(同じことを)訊ねたところ、遊女は言った。

「私は客の相手をしておりました。奥様のいない人がいたら、その方のために、急場凌ぎではございますが、湯を癒やして差し上げました。」

閻魔大王は言った。

「独り身の便宜を図ってやったというわけじゃな。ふむふむ。寿命を十二年延ばして進ぜよう。」

そしてさらに、泥棒にも(同じことを)訊ねると、泥棒は言った。

「私は盗みを働いておりました。服を天日干しにしている人がいたり、お金をばらまいている人がいたりしたら、私はその人の代わりに、少しばかり片付けてやったのです。」

閻魔大王は言った。

「洗濯をしている人と苦勞を分かち合い、(金をばらまく人の)代わりに力を尽くしたというわけじゃな。ふむふむ。おぬしも寿命を十年延ばしてやろう。そして現世に生まれ変わらせてやろうぞよ。」

(それを聞いて) 医者は、慌てて次のように嘆願した。

「閻魔大王様。このようなお裁きを下されるのですしたら、どうかどうかお願いします。私を現世にお戻しくださります。まだ家には息子が一人と、娘が一人おりますので、息子は泥棒にさせ、娘は(遊女にして)客を取らせればよいと存じます。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上、術業部(二五丁裏〜二六丁表)。『新鐫笑林広記』巻之三、術業部(第一七〇話、六丁裏〜七丁表)。○醫生 [yisheng] = 医者。現代中国語と同じ。「醫」は「醫(医)」の異体字。○妓女 [jinyu] = 遊女、娼妓、娼婦。現代中国語と同じ。左訓「ヤマ」。○お山は、近世の上方で遊女を指すことば。色茶屋に勤める商売女を言う。○偷兒 [tour] = 泥棒、盗人。現代中国語「小偷兒 [xiǎo tóu]」と同じ。「兒」は「兒」の本字。左訓「ヌスヒト」(盗人)。○冥王 [míngwáng] = 閻羅

「yantuó」、閻魔大王。死者の罪を裁く地獄の王。中国原本(京都大学附属図書館蔵、村文庫蔵、乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊本)、和刻本、ともに「冥」を異体字「冥」に作る。○技術 [jishu] = 専門的なテクニック。職業人としての技を指す。○行醫 [xingyi] = 医者の仕事をしている。医師を業としている。医者と遊女と泥棒の三者は、自分の「技術(どういう仕事をしていたか)」を説明するのに、それぞれ「行醫」「接客」「做賊」というように、「動詞+名詞」の二字句で答えている点に注意したい。中国刊本はこの形式を踏まえ、二字で明確に句読を切っている(原文に附した読点「、」は、和刻本では句読が切られていないが、中国刊本では句読が切られている箇所であることを示している)。和刻本が、遊女の返事「接客」の一文を微妙に読み間違えていることについては、後述する。○起死回生 [qǐ sǐ huí shēng] = 死んだ人を生き返らせる。医師が極めて優れていることを言う。「回」は「回」の俗字。中国原本は正字「回」に作る。○每常 [měicháng] = いつも。常に。『水滸伝』第五回に「若是每常要三五十尾也有。」(いつもなら四十匹や五十匹はすぐ間にあいます。)とある(日本語訳の引用は、中国古典文学大系28『水滸伝(上)』(駒田信二訳、平凡社、一九六七年一〇月、一七三頁)に拠る)。○差 [chā] = 派遣する。遣わす。左訓「ツカハシ」(遣はし)。○鬼卒 [guǐzú] = 閻魔大王の手下。鬼の兵卒。○勾提 [gōutí] = 逮捕する。捕まえる。「拘捕 [jiūbǔ]」「勾攝 [gōushè]」とも言う。左訓「メシトル」(召し捕る)。○把持 [bǎchí] = 一手に握る。独占する。左訓に「ハリアヒ」(張り合ひ)とあるが、「相」と張り合う「ニュアンスは、次の「抗衡」という語に強く含まれる。○抗衡 [kànghéng] = 張り合って互いに一歩も譲らない。対抗する。「衡」は、相手と対等であるという程度の意。左訓「モトル」(悖る)は、「閻魔大王の意に反する(そぐわない)」という程度の意味であろう。○發往 [fāwǎng] = へ送り出す。へ連れて行く。「發」は「送り出す」の動詞。「往」は「へ」という方向を示す前置詞(介詞)。○油鍋 [yóugō] = 油の煮えたぎった鍋。地獄における刑罰の一つ。○接客 [jiēkè] = 人没妻室者 = 和刻本の句読は中国原本の句読と異なる。中国刊本は「接客。人没妻室者」とする。遊女のこのセリフは、前の医者、後の泥棒のセリフと同一の構造で書かれており、初めの二字で自分の職業を答え、続いてその仕事の内容(技術)を説明している。医者は「私は医業に従事していた。病気の人がいたら……」と語り、遊女は「私は」お客さんの相手をしていた。奥さんのいない人がいたら……」と語り、泥棒は「私は」盗

## 『訳解笑林広記』全注釈(七)

川上 陽介(工学部教養教育)

## 序

本稿は、『訳解笑林広記』全注釈(一)、『富山県立大学紀要』第二六巻、二〇一六年三月)、『同(二)』、『富山県立大学紀要』第二七巻、二〇一七年三月)、『同(三)』、『東アジアの古典文学における笑話』、新葉館出版、二〇一七年一〇月)、『同(四)』、『富山県立大学紀要』第二八巻、二〇一八年三月)、『同(五)』、『富山県立大学紀要』第二九巻、二〇一九年三月)、『同(六)』、『富山県立大学紀要』第三〇巻、二〇二〇年三月)の続稿である。前稿に引き続き、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』(文政十二年(一八二七)刊、半紙本二巻二冊、全三〇五話) 第八〇話から第九五話までの原文・書き下し文・日本語訳・注釈を掲載する。

和刻本『訳解笑林広記』及び中国笑話関連資料の諸本、底本、凡例等については、第一稿を参照して頂きたい。『富山県立大学紀要』所収の論稿は、すべてWebによる閲覧が可能である。

⑧ 医女接客(医者いしよせつきゃくの娘が遊女いじよせつきゃくとなって客を取る)

## 原文

## 醫女接客

醫生いし 妓女ぎよ 偷兒ちゆうじ。三人死し 見み 冥王めいおう。王問わうもん 生前せいぜん 技術ぎじゆつ。醫士いし 曰い。小人こじん 行い 醫い、人有にん 疾い 病びやう。能よ 起おこ 死し 回かへ 生せい、王怒わうど 曰い。我われ 每ま 常じょう 差さ 二に 鬼卒きそつ 勾こう 提てい 罪人ざいじん。你なんぢ 反かへ 與よ 我われ 把は 持ぢ 抗かう 衡けい。可よ 下くだ 發はつ 一いつ 往わう 油鍋ゆくわ 受う 上じやう 罪ざい。次つぎ 問もん 二に 妓女ぎよ。妓ぎよ 曰い。接せつ 客きゃく 人にん 没な 妻室さいしつ 二に 者しや。與よ 他た 解かい 渴かつ 應おう 急きゆう。王わう 曰い。方かた 二に 便べん 孤身こしん。延えん 壽じゆう 一いつ 紀き。再また 問もん 偷兒ちゆうじ。答こたへ 曰い。做しやう 賊さく。人家にんか 晒さい 衣服いふく。散さん 放はう 銀錢ぎんせん。我われ 去い 替かへ 他た 收しゆう 二に 拾しやく 些しや。

王曰ク。與レ人分チ勞テ代レ力ニ。也。加テ壽ヲ十年。發ニ轉セン陽世ニ。醫士急ニ忙ニ哀告シテ曰ク。大王若シ如此ノ判斷セバ、只、求ニ放レ我ニ還レ陽ニ。家中ニ尚ホ有ニ一子一女ニ。子ハ叫ニ他ニ忤テ做レ賊。女ハ就叫ニ他ニ接セレ客ヲ便了。

## 書き下し文

## 医女 客を接客す

醫生いし 妓女ぎよ 偷兒ちゆうじ。三人死し 見み 冥王めいおう に見ゆ。王わう 生前せいぜん 技術ぎじゆつ を問ふ。醫士いし 曰い。小人こじん 行い 醫い、人有にん 疾い 病びやう 有れば。能よ く死し を起おこ し生せい に回かへ す、王怒わうど て曰い。我われ 每ま 常じょう 鬼卒きそつ を差さ して罪人ざいじん を勾こう 提てい す。你なんぢ 反かへ て我われ と把は 持ぢ 抗かう 衡けい す。油鍋ゆくわ に發往はつわう して罪つみ を受う けしむべし。次つぎ に妓女ぎよ を問ふ。妓ぎよ 曰い。客きゃく を接せつ す、人妻室にんさいしつ 没な ければ。他た の与よ に渴かつ を解かい き急きゆう に応おう ず。王わう 曰い。孤身こしん を方便ほうべん す。壽じゆう を延えん ずこと一紀いつき とせん。再また び偷兒ちゆうじ に問ふ。答こたへ て曰い。賊さく を做しやう す。人家にんか 衣服いふく を晒さい 晾りやう し。銀錢ぎんせん を散放さんほう すれば。我われ 去い て他た に替かへ て些しや を收拾しゆうしやく す。王わう 曰い。人にん と勞らう を分ぶん ち力りき に代たい る。也や 壽じゆう を加か ふること十年じふねん とし。陽世やうせい に發轉はつてん せん。醫士いし 急忙きふぼう に哀告あいこく して曰い。大王だいうわう 若も し此こ の如ごと く判断はんぱん せば、只ただ 我われ を放はな ち陽やう に還かへ すを求もと む。家中かちゆう に尚なほ 一子いつしよ 一女いつにょ 有あ り。子こ は他た に去い て賊さく を做しやう さしめ。女ぢよ は就すなは ち他た に客きゃく を接せつ せしめば便了べんりやう 。

## 現代語訳

医者いしと遊女ぎよと泥棒ちゆうぼうの三人は、死んであの世で閻魔大王えんまだいおうと会うことになった。閻魔大王えんまだいおうは、生きていたときの仕事の内容を問もんい質しつたした。医者いしは、言いった。

「私わたくしめは、医術いじゆつを業ごうとしておりました。病氣びやうきの人がいたら、優れた医術いじゆつを施せし、死者ししやを生せいき返かへらせることもできました。」

すると閻魔大王えんまだいおうはカンカンに怒いかって、言いった。